



「スポーツ県群馬」の推進に思う

前県教委体育課長 中山尚郎



我が国の最近における学技術の進歩に目覚しい科

伴う社会・経済の変化は、国民の生活様式を変え、日常における身体活動を著しく減少させた。そして、それは国民の体力低下や文明病の発生などの問題を引き起し、体力づくり・健康づくりのためにスポーツの大衆化、国民総スポーツの振興が叫ばれる様になっている。

特に本県では、昭和五十八年の群馬国体を控え、またスポーツ知事を自認する清水知事の就任と相まって、スポーツ振興ムードはいよいよ高まって来ている。こうした時に県の体育行政を担当する事は、この上もない光栄であり喜びでもあるが、反面、責任の重大さと己の微力を思い知らされている。

ところで、スポーツ振興には二面が考えられる。その一つは「エリートスポーツ・競技スポーツ」といわれる技術や記

録を強化向上させるスポーツであり、一つは、皆のスポーツ・大衆スポーツといわれる健康づくり・体力づくり運動の普及振興である。

御存知の様に、最近の本県競技スポーツの成績は素晴らしいものがある。世界選手権やアジア大会等に出場する選手が輩出し、全国高校総体や国体などでの活躍も目覚しい。国体の天皇杯順位が、その県のスポーツレベルを的確に示すものとはいえないにしても、一応の目安にはなろう。参考までに本県の昭和四十八年からの順位を挙げると、三一・二一・二〇・二五・一九位と向上し、五十三年はついに一〇位と順調過ぎる程の成績である。こうした飛躍的な向上は、各競技団体の長年にわたる努力の賜物で、その団体の役員として御尽力を頂いている次に挙げられる様な先輩各位の力に負う所が大きい。

山口 高音(二〇回) 軟式野球副会長
浜名 一雄(二二回) 山岳会長

- 清水 貞保(三〇回) バスケケット副会長
- 羽鳥治郎松(三〇回) 陸上軟式野球副会長
- 山口正三郎(三〇回) 漕艇副会長
- 須永 誠(三二回) ラグビー会長
- 丸茂 重貞(三三回) 卓球会長
- 須藤 清(三四回) 軟式庭球理事長
- 中曾根康弘(三五回) 陸上・銃剣道会長
- 石井 鎮世(四一回) 水泳副会長
- 小山 禮一(四二回) 軟式庭球馬術会長
- 真木 実(四四回) スキー副会長
- 山本 富雄(四五回) スキー会長
- 関口 登(四六回) 卓球副会長
- 橋爪 和夫(四九回) カヌー会長
- 鈴木 武文(五一回) バスケケット理事長

などの各氏で、誠に多士済々である。また、この下で直接の指導者として活躍している若手の同窓生は、教え切れぬ程である。そして、この各競技団体を統括する県体育協会の会長が大先輩の浜名一雄氏なのである。

一方、県民総スポーツを推進して、明るく豊かな活力に満ちた県民生活の実現を目指して、昭和五十二年十月に県スポーツ振興事業団(会長清水知事)が誕生した。更に、五十三年六月の県議会が全国に先駆けて「スポーツ県群馬」が宣言された事もあって、知事のいう「日本のスポーツ県群馬」の建設に向けて積極的な施策が推進されている。誠に頼もしい限りで、この事業団の理事長がまた我らが先輩高橋邦雄氏(二八回)なのである。

この様に本県のスポーツは、浜名・高橋両先輩を両翼として競技スポーツに大



「スポーツ県群馬」の宣言
群馬県庁

衆スポーツに推進されているといっても過言ではない。私自身も、両先輩を始め大勢の同窓の方々に支えられて職務を遂行しているといえよう。誠に有難い限りである。

四〇年もの昔、上和田から乗附に移転した頃の高崎中学校での生活——それは陸上競技を中心にした毎日だったが、こうしてペンを執っていると新旧両校舎のグラウンドが懐かしく思い出される。当時は、高々の名門スポーツとなっていたラグビーやサッカー部はなく、野球や陸上・体操・柔道・剣道・水泳・庭球などの運動部が活躍していた。もちろん、現在とは違い、施設は不備で、指導も充分には受けられず自分達で研究し練習したものであった。今回の恵まれた環境、特に整備されたスポーツ施設を見るにつけ、現役諸君の一層の奮起を期待したい。

それにつけても、後輩OB諸氏の御尽力で、こうした立派な会が組織され後輩の活動を援助されている事は誠に有難い事で、感謝申し上げますと共に、今後の発展をお祈りする次第である。

(四〇回・県立高崎商業高校長)

同窓会長就任に当って



高々同窓会長

原 一 雄

高々のスポーツの後援団体として翠巒体育会が、発足以来ますます順調に活発に発展している事は誠に慶賀に堪えませぬ。

私は、本来二月の同窓会総会において、小山長四郎前会長（一八回）の後を受け輝かしい八〇年余の歴史を持つ母校同窓会の会長をお引き受けする事になりました。小山さんの後を継ぐには私は微力ではありますが、幸いに私より若く優れた柴山大五郎さん（三二回）と小山禧一さん（四二回）が副会長に加わってくれましたので、前からの京浜地区を代表する副会長である入沢武右門さん（三一回）と共に、母校のためこれからの全力を尽して参りたいと思えます。

高々は、八〇年の歴史を通じて、今や全く理想的とも思われる高校の偉容を表して参りました。グラウンドからすぐ続く観音山や護国神社の森の緑は、何にも代え難い優れた環境を作っていてくれます。約五〇、〇〇〇㎡（一五、〇〇〇坪）のグラウンドも、先人の努力によりここまで拡張されたもので、欲を言えば限り

はありませんが、まず適切な広さになつたと云えると思えます。

高校の三年間は、白紙がどんな色でもにじませる様に、自覚をもって一生の人生を過す上の根本の基礎となる心と腕、知徳体のすべてを身に付ける最も大切な時であります。知識については、今の制度は過重な程に力を尽されております。知識はもとより大切ではありますが、徳に連なる心と、人間生涯の闘いの根元をなす体育は、また更に重要であります。

私は昔、当時出たあらゆる全集を濫読して、体の事を忘れており、そのため卒業後長い療養生活をしてしまいました。そのため、今日まで体を造る事に、その大切さが痛い程によく分るのであります。また更に、スポーツを通じて、集団としての礼儀・秩序・勇気・決断・忍耐・粘り等のすべてを体力と共に身に付ける事は、生涯を通じて闘いであるべき人生の根本義につながるものはありません。

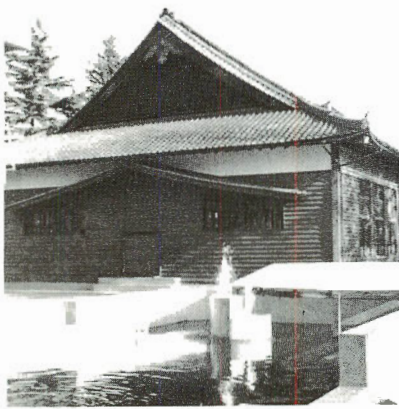
開校以来八〇年の歴史を祝う記念すべき事業に、あの多額な寄附金のその大部分をあげてグラウンドの整備に充てた事

も、その意義を高めるための大きな壮挙であったと思えます。校舎もことごとく鉄筋建築となり、見事に完成されたグラウンドと共に、井上房一郎大先輩（一五回）の実に多年にわたる庭園環境造りによって、他に見られない高雅で清新な特色を持つ学校となりました。学校側においても、今日までの中野敏宗校長を先頭とする諸先生の努力に深く敬意を表する次第であります。そうしてまた、翠巒体育会が包括するすべての運動部が、見事な統一の下にこのグラウンドを活用している事は、ここに学ぶ者の幸せを思わな

い訳には参りません。人より優れた勝れ記録を伸ばす事もスポーツの持つ特色ではありませんが、学ぶ人のすべてが根本の心技体の充実を目指し精進する事と、翠巒体育会の今後のますますの充実と活躍を祈つてやみませぬ。 (二九回・群馬米穀KK会長)

剣道教室に改装された旧講堂

(S五四・二)



昭和五十三年度

高々運動部活動状況

バレー部

◆関東大会 東京都(五三・六)

高々2 13 15 15 13
15 15 2 15
1 法政大第一高
一回戦

高々1 8 15
12 15 9 15
2 法政大第二高
二回戦

◆全国総体県予選 (五三・六)

高々2 0 長野原高 四回戦
高々2 0 伊勢崎工 五回戦

高々2 1 高崎商 準決勝
高々0 2 桐生商 決勝

◆国体県予選 (五三・七)

高々2 0 松露(前高三) 四回戦
高々2 0 前橋工 五回戦

高々2 1 桐生工 準決勝
高々0 2 桐生商 決勝

◆秋季大会(本間杯)(五三・一一)

高々2 0 吉井高 四回戦
高々2 0 農大二高 五回戦

高々2 0 富岡高 準決勝
高々2 0 桐生商 決勝

◆新人大会・全国選抜大会県予選 (五四・一一)

高々2 0 前橋工 二回戦
高々2 0 吉井高 三回戦
高々2 0 前橋高 四回戦
高々2 1 高崎商 決勝



特別寄稿

私とスポーツ



県スポーツ振興事業団 理事長 高橋 邦雄

高橋 邦雄

高崎中学校時代は、八kmの道を徒歩で通学していたので、運動部に入る訳にはいかなかった。やむを得ず、学校では、専ら対校試合の応援に精を出した。僕らの時代、運動部で強かったのは野球とテニスだった。野球は甲子園にこそ行けなかったが二年続けて県下大会で優勝したし、テニスも二年連続優勝した。大正十三年から昭和四年にかけての五年間の事である。対校試合は、学校挙げての行事だった。自転車を通じて、よく前橋中学校へ応援に出掛けたものである。

元々スポーツが好きだったので、郷里の町の中学生仲間と草野球のチームを作り近村のチームと試合をして楽しんだ。夏休になると、毎日の様に小学校に出掛け、テニスで汗を流した。だが公式記録？がなかった訳でもない。五年の時、運動会で二〇〇Mハードルに優勝し、朝日新聞寄贈のメダルをもらった事がある。もっともこれは、優勝候補の陸上競技部の選手が最後のハードルを引掛けたため僕に優勝が転がり込んだのだが、とにかく優勝したのは紛れもない事実だから今も僕の自慢話の一つになっている。

旧制松本高校に入ると、しめたとばかりちゅうちよなく野球部に飛び込んだ。旧制高校には、何でも好きな事に全身を打ち込める余裕があった。高校三年間は、野球に明け暮れたと言っている。試験の前日まで練習は続けられる。「おい、そんなにしている大丈夫か」と低空飛行を続ける——尊敬される事にはならないが軽べつされる事はない。我々は妙な事に殊の外感心する癖があった——寮の先輩が心配してくれたが、落第は免れた。しかし、皆で熱中した割に、草野球出身者が多かったせいも、腕前の方は上がらず、見るべき成績は挙げられなかった。その外、学校や寮で行う駅伝・サッカー・テニスなどのクラス対抗や対類(文科甲・乙、理科甲・乙) 試合には、いつも選手として出場した。

旧制高校は、戦後の学制改革で昭和二十五年に廃止されたが、運動部は今も残っていて、毎年東京で陸上競技や野球・サッカー・テニスなどのインターハイが開かれ、老童どもが若さを競っている。しかし、後継ぎがなく、一番若い者でも五〇才になるので、いつまで続けられるか、先は知れているが、それはともかく、スポーツを通じて、自分の時代だけでな

く、先輩・後輩とのつながりが出来て、同窓会に行けば顔が利くし、世間もそれだけ広くなって、誠に楽しい。運動部にいた功德と言うべきであろう。学校を終えてからも、職場の軟式野球やテニスでは大いに活躍したが、五〇台の後半からはだんだん遠慮？する様になった。

昭和五十二年十月、県にスポーツ振興事業団と言う財団法人が出来、知事から理事長を引き受けてくれないかと言う依頼があったので、元々好きな道であり、これも大事な御奉公と思つて承諾した。この事業団は、県民が生活の中にスポーツを取り入れ、皆でスポーツを楽しみ、健康な体と心を造るための推進役を果そうと言うもので、県民総スポーツの実現を目指している。我々の生活は、機械文明の進歩によって誠に快適なものとなったが、その反面運動不足となり子供も大人も体と健康に色々問題が起きて来た。これを解決するには、スポーツによる所

が大きいと言うのが、先進文明国共通の認識である。運動部の諸君に言う事はないが、外の皆さん！あなたもスポーツをしませんか。(二八回・前参議院議員)

高々2——0 富岡高
高々1——2 桐生商 一位
◆全国選抜大会北関東予選
宇都宮市(五四・二)

高々2 15 | 15
6 | 0
栃木高 準決勝
高々1 9 | 15
15 | 13
2 足利工業大附属高 決勝

サッカー部

- ◆全国総体県予選 (四三・五) 高々1——1 高崎工 PK負一回戦
- ◆全国大会県予選 (五二・六) 勝点5(Aグループ三位)

- 西毛地区第一次予戦 高々1——2 新島学園
- 高々2——2 農大二高
- 高々2——0 藤岡工
- 高々3——3 榛名高
- 高々1——1 富岡高
- ◆新人大会 (五三・一〇) 高々0——2 伊勢崎工 一回戦

柔道部

- ◆学年別個人選手権大会(五二・五) 一年の部 志田 稔 五回戦

- ◆全国大会県予選 (五二・六) 団体 高々1——2 藤岡工 一回戦
- 個人 軽重量級 白石克彦(二年) 五回戦

特別寄稿

剣道の思い出



教頭 滝上豊太郎

寒い冬の朝、勇ましい掛声が響き渡る。本校の剣道場の近くを通る時、何となく心が引き締まる。気持の良い緊張感が体全体にみなぎり、自分も剣道の稽古をしている様に思えてならない。

私が剣道を始めたのは、昭和十一年、小学校五年の時である。担任は、群馬師範学校出身の体格の立派な若い先生であった。その先生が、木造校舎の何も無い工作室で指導してくれた。やっとなら買った竹胴の道具一式を黒い網目の袋に入れて担いで登校したが、子供ながら昔の剣士になった様な気がして得意になっていた。部員も十二、三人で、放課後遅くまで練習した。先生との稽古で、面を打たれる時、打ち下ろす竹刀で頭の上から後頭部まで打たれたのも懐かしい思い出である。寒稽古も楽しかった。薄暗い朝、小さな自転車で白い息を吐きながら、夢中で学校に行く。冷たい体も、剣道着に着替えて少し練習をすると、頭上から湯気が出て来る様になり、実にすがすがしかった。

昭和十三年、中学校に入学し体育に剣道があったので何よりもうれしかった。習い始めの者よりは少し上手に出来たの

が良かった。しかし、剣道部には入らなかった。二年生のある日、三年生との対抗試合があった。私の身長は中位だったので、クラスの真中にいた。試合は勝ち抜き戦で、交互に勝敗が続いた。いよいよ私の番になり、夢中で戦った。上級生との試合なので、真剣そのものだった。一人、二人と勝ち抜いて、ついに一〇数人に勝った事は今でも忘れる事が出来ない。それで剣道部員にさせられてしまった。

剣道部に入り、練習に明け暮れた毎日だった。余暇もほとんどなくなり、成績も下降気味になり、大変苦労した。この時、部の友人の〇君と話し合った。とにかく、毎日の授業を大切に、豆テスト等は絶対に落さない様に、お互いに競争する事にした。学期末の成績を見せ合いながら努力した。お陰で二人共上位に

いる事が出来た。〇君は、剣道の試合に敗けると、庭の柿の木に棒をなわでつるし宮本武蔵気取りで技をみがいていた様である。それで、四年生のころには、私と同じ位の技量になった。色々の校内試合の決勝では、二人でよく勝負した。秋の運動会で、学年を紅白に分け試合をした

が同点で大将同士の決戦をした事も記憶に残っている。

昭和十七年秋、海軍兵学校に入学した。この学校は、既に持っている段位を二階級下げるので、二段から一級にさせられた。今まで使用した竹刀より短いものを用い、一〇m開いて立合い試合をした。両者が猛烈な勢いで進み、体当りの瞬間に打ち下ろすのである。中学時代に練習した剣道とは、余りにも異質なので大いに当惑した。足の開きが狭いと倒されるし、竹刀の打ち方が弱いと認めてくれな

い。すべて最初からやり直してであった。早朝練習に励み研究を積み重ねて、二号生徒の時に二段まで昇り、一号生徒の時に三段まで進む事が出来た。この学校で三段を持っている者はわずかであったので、特にうれしかった。

終戦後、我が家の物置の中から小学校時代の竹胴が出て来たが、小手の皮も虫に食われて使い物にならなかったが、何ともいぬぬ親しみを感した。ただ残念な事はその後竹刀を持つ機会がなかった事であるが、至極健康であるのは剣道のお蔭かも知れない。

昭和五十三年度 高々運動部活動状況



柔道部

- ◇新人大会 (五三・一一)
- 高々4 — 0 館林高 二回戦
- 高々1 — 4 伊勢崎商 三回戦

柔道部相撲班

◇関東大会県予選 (五三・五)

- 団体 勝率3・勝点15
- 高々2 — 3 桐生商
- 高々0 — 5 農大二高
- 高々4 — 1 大間々高
- 高々1 — 4 勢多農林
- 高々3 — 2 中之条高 四位

- 個人 勝 (三年) ベスト8
- 今村 功 (二年) ベスト16

◇関東大会 川崎市 (五三・六)

- 団体予選 勝率1・勝点8
- 高々2 — 3 茨城・那珂湊水産 一回戦
- 高々4 — 1 神奈川・藤沢工 二回戦
- 高々2 — 3 埼玉・蕨高 三回戦

個人予選

- 軽量級 西山 功 (二年) 二回戦
- 重量級 今村 勝 (三年) 一回戦
- 無差別級 斉藤義之 (三年) 二回戦
- 高橋弘幸 (一年) 二回戦
- 志田 稔 (一年) 一回戦

翠巒体育会

に寄せて



大塚喜八郎

“ああ我が母校”。この言葉をよく吟味して見ると、日本人としていかに含蓄のある言葉であるかが分るような気がする。私は、六・三・三制の施行された戦後の新制教育過程にあつて、六・六制の教育を受け高々を巣立った。顧みれば、卒業して早二七年。“光陰矢のごとく、歲月流るることし”のたとえの通り、時の過ぎるのは早いものだ。ましてや、翠巒体育会の一員として機関誌に寄稿を依頼される身分にまでなつてしまつた。浅学非才の小生にはなほ重任の事ではあつたが、それ故に一言物申すと聞き直つた次第である。

その一つ。現今の高々生、いや一般の高校生と言つた方が適切かも知れないが、余りにも自主性と個性のないただ勉強々々に明け暮れた人間になつていく様な気がする。我々のころはこの様な輩を我利我利野郎と言つたが、今の連中は我利が楽苦利となりあえて強がりの務めをしているとしか映らない。

その二つ。返事は良いが、反発の精神がない。OBとしてたまにはグラウンドに顔を出す、現役の彼らは、一つ物を申すと二つの返事、二つ物を申すと四つの返事だけはするが、反骨の気力がない様に感じる。知る事と解する事の知恵がなさ過ぎる。

その三つ。教師は、何のために教鞭を執っているのか疑問を感じる。昔よく言われた聖職の意味を忘れ、専らPTAの機嫌ばかりに気を配り過ぎていてのではないだろうか。

以上聞き直つては見たものの、小生も高中・高々のOBである。我々の在校中には、内藤由己男校長(一六代)を始めマンキー・オハル・エーカー・ドジ・キョーケン・ウラナリ・メチ・タジ・花子・ナベ等あだ名で親しまれた先生が数多くおられたが、今はどうだろうか。今なおこの様な風習が引き継がれているとすれば、OBとして見上げたものと敬服する。現今の高々には、在りし日の質実剛健、蜜カラさがなくなつてい。いや返つてそれらの風習をきらう気配が強く、もやしっ子の機械化人間を造成する事に方向付けされている様に見受けられるが、危ぐの念を抱かずにいられない。

バレーがよい所まで行つた、バスケットがインターハイの出場権を得た、サッカーが初めてインターハイに出場を果たした等喜ばしい話も聞くが、しかしその後が続かない。そしてラグビーはと言えば、いつも県下では優勝するが、埼玉が強過ぎてインターハイ・国体にも出場出来ないと言ふ。なぜだろうか。我々の時代よりグラウンドは広く、そして芝生、体育館も雨漏りもなくましてや風の吹きすさぶ透き間もない立派なものがあつて、どうして昔以上の成果が出せないのだろうか。誠に残念でならない。

我々は、在学中、国体に二回、インターハイに二回出場した。このためには相当のしごきがあり、練習中に倒れる者もおれば、余りの苦しさに合宿を逃げ出す者もいた。しかし、部員一人一人が助け合い励まし合つて目的をなし遂げたものである。今も変らぬ高崎駅の前で、応援団の檄を受けて旅立つたあの時の感激。

インターハイ出場後、宝塚で擦れ違つたグリーン袴の女学生等、数々の思い出がしのばれる。ただ惜しまれる事は、ラグビーには女子部がない事である。国体列車の中でいつもいい思いをしていたのがバスケットとバレーで、高女又は高市女のいずれかがペアとなつて、我々に見せつけていた。先日バスケットでは部史出版記念会を催したが、その席にもちやんとOG花が添えられていた。しかし昔と違つて大分しおれたOG花であつたが、いずれにしても青春時代は良き思い出である。この思い出も我が母校高々があつたればこそ作れたのであり、これからも数多くの青春の思い出が作られる事を願つてやまない。そして強くもなりたい。翠巒体育会の面々も、口には出さないが、それを期待している事と申す。最後に、翠巒体育会の皆さんのますますの御健勝と、青春の謳歌を願つて終筆する。(五一回・ラグビー部)

◇全国大会県予選 (五三六)	
団体	勝率1・勝点8
高々1	4 桐生商
高々5	0 樹徳高
高々0	5 勢多農林
高々2	3 中之条高
高々1	4 大間々高
高々0	5 農大二高
個人	六位
西山 功(二年)	四位
◇全国新人大大会県予選 (五三二)	
団体	勝率4・勝点18
高々5	2 中之条高
高々5	0 桐生商
高々5	0 樹徳高
高々2	3 農大二高
高々3	2 勢多農林
高々3	2 勢多農林
同点決勝	一位
個人	
一年生の部	志田 稔 三位
	村田宏光 ベスト8
	野中克彦 ベスト16
	小関照雄 ベスト16
	高橋弘幸 ベスト16
二年生の部	西山 功 二位
	神村伸一 ベスト8
	武井信生 ベスト16
	三宅浩一 ベスト16
	白石克彦 ベスト16
◇全国新人大大会 高知市(五四一)	
子選	
高々0	3 高知・高知工 一回戦
高々0	3 和歌山・箕島高 二回戦
高々1	2 広島・崇徳高 三回戦

OB会の活動



OB会だより

柔道部

桜井 弘

昭和五十四年の定期総会兼新年会は、一月三日小香女(高崎市旭町)にて盛大に開かれました。昭和三十年の全国大会(大分市)に出場した時の主将沼賀勝平氏(五五回)、当時実力県下一二と謳われた副将田村悟氏(五五回)を筆頭に、吉原成哲氏(七五回)までの約四〇名が、今井孝造先生(現富岡高校)・江原隆起先生(保健体育科)を囲み、和やかに歓談しました。

席上、次の事項が決議されました。

一、現役の後輩は、全国大会・関東大会出場を目指して猛稽古して欲しい。

(但し、柔道で出場せよ。)

一、OBは、春季・夏季合宿に積極的に参加し、側面より指導応援する。

一、毎年一月三日午後一時より、母校柔道場において、OB対現役の試合、並びに稽古を行う。試合後五時より「小香女」(電話二七〇五五九)にて、総会兼新年会を開催する。

その後、三月二十四日〜二十七日まで行われた春季合宿には、早稲田大学柔道部OBの関口茂樹氏(六三回)、伊勢崎警察署の黒沢義明氏(七〇回)、県教員チームで大活躍の田淵吉二氏(七三回)・西邑染高校)、全日本医科歯科大学大会中量級優勝の吉原成哲氏(順天堂大学)等強力なOBが参加し、後輩を指導しました。なお、八月二十二日〜二十七日には夏季合宿が行われます。

昭和五十三年度の翠巒クラブの活動は以上の様でありましたが、四月からはまた群馬リーグも始まる予定で、今から足がソワソワしている次第です。

翠巒サッカークラブ

サッカー部

赤羽 英一

翠巒体育会の母体となりました翠巒サッカークラブも、現在二〇〇名を数える大所帯となっております。

この二〇〇余名の年明けが、恒例の初蹴り会と言っても過言ではないでしょう。今年も例年通り、一月二日に母校のグラウンドにて行われました。年寄は国峰善次郎会長(五〇回)から、若手は現役の連中まで、一〇〇名程が一つのボールを

正月から目の色を変えて追い掛けるのだから大変なものです。そのプレーを見るに、サッカーのスタイルは変わっても、ボールに対する執念は今も昔も一向に変わっていないんだなあと言うのが一目瞭然でした。その後高松荘(高崎市高松町)に移動し、一四時過ぎより総会が開会されました。来賓には中野敏宗校長・井上房一郎氏(一五回)を始め名士を数多く迎

え、今年も翠巒クラブが良い成績を残せる様に、会員が無事に過せる様にと祈って乾杯しました。正月早々、疲れ切った体に、飲み干した酒の美味かったこと……

さて、第五号にて報告以後の翠巒クラブの戦績について報告しておきます。昨年春の群馬三部リーグでは残念ながら

らブロック二位で涙を飲んだ訳ですが、七月に行われた天皇杯県予選は比較的満足の行く成績が残せたと思っています。普段練習もしないぶつつけ本番の我がクラブにとって、夏の厳しい日差しは最大の敵でありましたが。一回戦、不戦勝。二回戦、対吉岡クラブ4-1。三回戦、対榛名クラブ3-2。四回戦、対三ツ葉電機(一部リーグ)4-3。順調に準々決勝に駒を進めました。ここで一部リーグ一位の東京三洋(本大会優勝)に会い、前半1-1ながら後半0-2、結局1-3と突き放され惜散しました。

秋の高崎市民大会では、参加一〇チーム程度ながら、優勝と言う荣誉に輝き會員一同喜んでおります。

今年一〜二月に行われた県選手権では、くじ運の悪さか、夏に敗れた東京三洋に一回戦で当り、絶対的不利を予想されながら、2-1で勝利をつかみました。これには勝った我々の方が驚きましたが、「高々魂」ここに有りて天下に轟かせたと思っております。二回戦は、気を抜いてしまったのか、高藤クラブに3-3からPK負で惜敗してしまいました。

昭和五十三年度の翠巒クラブの活動は以上の様でありましたが、四月からはまた群馬リーグも始まる予定で、今から足がソワソワしている次第です。

(七三回)

群馬県議会議員

小川薬品株式会社取締役社長

小川 健 二(三〇回)

高崎市住吉町一
電話〇二七三(三三)七五〇〇

株式会社 正木屋

代表取締役

高橋 正次(三二回)

高崎市間屋町一四一
電話〇二七三(六一)四五九一

東京海上火災保険株式会社 代理店
明治生命保険相互会社
有限会社 小森谷商店

代表取締役

小森 谷 久(四七回)

高崎市下豊岡町五七五
電話〇二七三(三三)二五三〇

藤井獣医科医院

藤井 良次(四八回)

群馬郡榛名町下里見二七〇九
電話〇二七三(四三)三八二四

部史の出版 バスケット部

須永 孝

高々の八〇周年記念を目前にした昭和五十二年春、高々バスケット部が高中籠球部として結成され五〇年を迎えたのを機に、前々から出ていた部史を造る話がやうやく具体化されました。以後、橋爪良恒氏(四四回)を総括責任者とする編集スタッフの努力で、本年二月、「高々バスケット部五〇年史」が発行されました。

〈編集スタッフ〉

顧問 清水 貞保(三〇回)

井上卯一郎(三三回)

事務局 ◎川嶋 尚武(四九回)

記録篇 ◎鈴木 武文(五一回)

◎岩田 武男(五三回)

高橋 武男(五七回)

金田 博之(七二回)



バスケット部史出版記念会
(S54・2・25)

外史篇

◎須永 孝(四七回)

◎長野 幸国(四九回)

平田 英治(四九回)

熊井 義泰(五四回)

青木 元彦(六二回)

名簿篇

◎反町 定夫(五〇回)

◎友松 敬三(六一回)

森田 忠吉(六二回)

内藤 克己(六七回)

会計

梅山高次郎(四七回)

◎古川 康夫(五三回) 敬称略

部史は五〇〇部作製、高々へ寄贈しOB会員を始め関係者に配布し、また現役部員や今後の新入部員に高々バスケット部を永い伝統の中でとらえてもらうために贈呈しております。

「高々バスケット部史出版記念会」は二月二十五日、暢神荘(高崎市椿町)で行われました。当日は、母校の諸先生を始め、翠巒体育会役員、二年連続インターハイ出場の際にお世話になった方々、高崎女子高校・高崎市立女子高校OG、現役の保護者有志等、一二〇人余の参加を得て極めて盛大に挙行出来ました事を感謝を込めて御報告申し上げます。
(四七回)

高々水泳部三〇年

水 泳 部

角田 達夫



「あれからもう一〇年か……」。脳裏を数々の思い出が走馬燈のように駆け巡る。

る。

昭和四十一年春、高々へ入学し、その足でプールサイドへ出掛けたのが水泳部との出会であった。当時は、まだ地下水を細い一本のパイプでくみ上げ、消毒用の石灰をバケツの中で溶き、それをまきながら泳ぐのが毎日であった。三年になつた時、ようやく高々のプールも近代化されて浄化槽が設置され、プールの回りには金網が張り巡らされた。合宿の時には、サーチライトが取り付けられ、その光の中で力一杯水しぶきを上げたものだった。

我が水泳部も、かれこれ三〇年の歴史を数える。私の知る範囲では、小森谷久さん(四七回)を筆頭に、新谷恭一さん(五四回)、田胡吉明さん(五四回・OB会長)、小此木勝さん(五六回・OB会幹事)、近くになると秋池宗一郎さん(六五回・翠巒体育会副会長)、小茂田猛さん(六六回・群馬スイミングスクール指導課長・日本水泳連盟競泳委員)；後輩には脇孝二(七六回)・野村照夫(七六回)などが顔を出す。

現在、OB会の活動としては、年に二回(合宿時・忘年会)の集りを持つている。酒豪がグラスを傾け、話題は様々な思い出と共に教育論・人生論・哲学へと熱が入って来る。当に、「青春」そのものである。現役の諸君も、やがてOBになった時、今の高々を語り若い心を大いに伝えて欲しいものである。最後に、水泳部の発展を期待すると共に、OB会の皆様の御健康と御活躍を心より祈ります。
(六八回)

群馬県議会議員
三井シャッター工業株式会社取締役会長

橋 爪 和 夫(四九回)

高崎市片岡町一―六一―五
電話〇二七三(二四)〇七四五

中尾小児科クリニック

小 川 進(五一回)

高崎市中尾町六六四―二七
電話〇二七三(六二)一〇一

小川薬品株式会社

小 川 清 治(五六回)

高崎市上並榎町二七八
電話〇二七三(六二)二二二

葬儀・祝儀の総合商社
株式会社 田 胡 忠

専務取締役
小 此 木 勝(五六回)

高崎市高関町三一―一―二
電話〇二七三(二七)三三三三

剣 道 部

青春の絆 3



馬賊の頭領



古 関 実

—— 高中出でから
一〇余年ヨイショ
今じゃ馬賊の親分
ヨイショ………率

いる部下は五万人ヨイショ……。戦前・戦中に流行した「五万人節」である。高崎商業学校でも、前橋中学校でも歌われていたかも知れないが、少年時代の私には、高崎中学校専門の歌である様に思っている。校歌でもある様に聞えた。そして、馬賊になりたくて受験し入学した。馬賊の頭領ともなれば、体力・腕力共に部下より優れなければいけないと考え、剣道部を選んだ。

だが時期が悪かった。昭和二十年四月の入学、すなわち太平洋戦争終結の年である。放課後の練習に行っても、相手は同級生ばかり、上級生を敵の馬賊に見立ててお手合せ願う事を楽しみにしていたのに全く期待外れであった。しかし、学

校の様子も分り周囲の事も徐々に気が付いて来ると、剣道部員のみならず学校全体の生徒の数も少なかった。毎週月曜日の朝礼には全校生徒が集まり学校長・学年主任の話聞いたが、上級生は教室に入らずそのまま校門から出て行ったのである。そして我々一年生が、「名も高崎の西北に……」と『翠樹』を合唱して見送った。後で知った事だが、その年の二月から授業の停止と生産活動への学徒動員が実施されていたのであった。三月には東京が大空襲を受け、四月には戦艦大和が沈んだ。五月には同盟国ドイツが無条件降伏し、六・七月の麦刈と田植の時には農家に泊り込みで勤労奉仕をした。八月の夏休中には高崎も爆撃され、今まで学んだ日本の歴史の大部分が洗い流されるのを目の当りにしながら終戦を迎えた。我が馬賊修業のための剣道場も、軍需工場の指定倉庫として変身する事を余儀無くされ、綿火薬の原料が山と積まれてあったのである。

わずか四カ月前の高中剣道部員としての思い出である。教えを受けた先生の外は、先輩も同輩もほとんど忘れてしまった。三四年も前の人生の短い一コマに過ぎない。

しかし、名誉と伝統のある高中剣道部に在籍した誇り、戦前の剣道と戦後の剣道と結び付ける継承の責任、そして馬賊の頭領へのあこがれが、今日まで私に剣道を続けさせている(剣道教士・七段)。過ぎし日の出来事は忘れても、少年時代の夢とロマンは決して忘れる事はない。—— 果てしなく広がる大陸の荒野、地

平線に沈み行く真赤な夕日を浴びながら、二人の馬賊は頭領の座をかけてゆつくりと抜き合せた。目と馬具と青竜刀がギラツと光った。—— (五〇回)

剣友会三〇周年



若 林 元

高々剣友会が創設されたのは、私が卒業式を終えた昭和三十四年三月末の日曜日である。顧問の網中正昭先生(現県教委高校教育課参事)が「お前達はまだ酒を飲んではならぬ」というので仕方なくジュースで乾杯したが、不思議な事に翌日生れて初めての二日酔いを味わったのを昨日の様に思い出す。あれから二〇年。当時よりしばらく事務局を預かっていたが、多忙という言訳で、ここ数年は同期の吉野宏一にその責を任せ、剣友会の集会にも顔を出せずにいる。

他の運動部と異なり、剣道は、戦後その活動を制約されたため戦前の先輩とのつながりは中断され、最近そのつながりを作る動きがなされているが、剣友会の最年長者は私より五年先輩の小林桂一郎氏(五三回)となっている。わずか五年といっても、当時の私にとつて先輩は、雲の上の人の様なそんな感じがした。今年の卒業生から見れば、私は二〇年も先輩であるから更にその上の神様の様に見えるのではないかと思うが、残念ながら、一度も剣を交えた事のない私を先輩というよりどこかのおじさん位にしか思

翠樹体育会

会計報告

昭和五十三年度

副会長 秋池 宗一郎
会計監査 東 秀和
吉野 宏一



収 入		
摘 要	金額(円)	備 考
繰越金	302,173	
年会費	195,000	15000×13部
総会費	96,000	
機関誌広告費	75,000	第5号5000×15
寄付金	30,000	
利息	826	
計	698,999	

差引残高

支 出		
摘 要	金額(円)	備 考
総会費	131,000	
総務費	105,000	関東・全国大会出場13部
事務局費	17,860	
機関誌費	405,000	第4号300000 第5号105000
祝賀金	10,000	高々80周年記念式典
謝礼	10,000	編集関係 5000×2
慶弔費	1,000	
計	679,860	

19,139円

わなないであらう

剣友会創設の当時は、まだ剣道部の歴史も浅く、会員も三三名で、先輩・後輩のつながりも兄弟の様な関係だった。私が現役の時には、部活動の外に、共にキャンプに行つて酒を飲み騒いだり、合宿の夜は護国神社・観音山へアベックのぞきに行きどろぼうと間違えられて追い掛けられたり。もしそのころ学校に知れたら、正に退学だったろうと思う様な事も度々。その善し悪しはともかくとして、本当に仲間意識は強かった。OB会の目的とは、その仲間意識の延長である。いつの世になつても、同じ道場で稽古し、合宿の飯を食い、試合に勝ちそして敗れて涙し、その汗と涙の一粒一粒の思い出を語り合い懐かしみ合う。そんな人間の集りを造る事だと思ふ。

人間関係とは、常に接していなくては分らないものだ。二〇年を経て、自分の身近な年代の人々とは語り合えても、その裾の年代と語れないのはやはり接していないからである。OB会を考える時、ある特定の年代層を中心としたものでは決してうまく行かない。常に新しく入つて来る人々の気持を理解し、語り合える場を作つて行かなくてはいけない。ただ本当に心から語り合えるには、その世代世代において、その人々が自分のエネルギーを燃やし尽せたかどうかが問題である。(五八回)

剣道部の生活



林 茂

初めて剣道場に入った時、先輩の熱心な練習を見て、「よし、僕も一緒にやろう」と胸を踊らせていた。ところが、竹刀を持たせてもらつてから約二カ月間は基本練習ばかりで、全然防具を着けさせてもらえなかった。しかし約一年経つてから基本の大切さを知らされ、単調な毎日の基本練習をして良かったとしみじみ感じた次第である。

顧問の平石健三先生には、いつも練習で厳しく指導して頂いた。お陰様で、突き技に対してこわいと感じなくなつた。首の下部から胸にかけて、毎日あざが絶えなかつたと記憶している。これは僕一人ばかりではなかつた。これが、今では懐かしい思い出となつて残っている。

春・夏の合宿、特に夏季合宿は、期間も長く、バルサンを焚きながらの合宿所生活は現在の合宿とはまた違った味わいのあるものだった。苦しい事の連続だったから、壁に書いたカレンダーを塗りつぶす時の快感は格別であった。僕らが三年になる春に、別府重竜先生(国語科・剣道)が着任された。別府先生が練習を見に来られ、あいさつの時、剣道場周辺の整理をする様に注意された。以来、剣道場へ行くといつてもその事を思い出す。別府先生は、まだ若く、びしびしと指導して下さいました。それまでは部員同志で練習する事が多かったのだが、別府先生が来られてからは、毎日剣道場に先生の姿の無い日はほとんどなかった。週の半分位は平石先生も練習に姿を現すから、二人の先生からにらまれながらの気の抜けない毎日が続いた。皆腕を上げて関東大会群馬代表に高々が選ばれた。丁度関東大会と翠巒祭の予定が重なり、当然最終日まで試合会場に残る心算だったから、紅白歌合戦の方は留守隊に任せていた。ところが、予想に反して最終日の朝は群馬にいた。ぶつつけ本番で紅白に出場する破目となつてしまった。高々三年間を通して、剣道部の無い高校生活は考えられなかつた。今も剣道部が続いているからこそ、高々に足を運ぶ張合いがあるというものである。剣道部の活躍を期待している者の一人である。(六八回)

カットの写真

創立六〇周年記念文化祭

(S三三・一一・一〇)

高 崎 高 校 剣 友 会

網 中 正 昭 (会 長)

高崎市上並榎町七〇五―五

別 府 重 竜 (顧問)

勢多郡大胡町大胡 三九〇―五

小 林 桂 一 郎 (五三回)

熊谷市見晴町三九七―二

長 野 詮 明 (五四回)

千歳市平和無番地官舎 七―四〇四

笠 井 孝 親 (五五回)

高崎市若松町二

真 木 俊 次 (五五回)

鎌倉市大町四一八―一

松 本 禎 三 (五五回)

山梨県中巨摩郡敷島町牛匂 二七四〇―四一

柳 沢 敏 (五五回)

高崎市下和田町二―一五―七

横 田 茂 (五五回)

高崎市上並榎町五六一―三

スポーツ雑誌



竹内俊雄

先日の陸上部OB会総会の席で、大田部保先輩(五二回)から急きよ原稿の依頼を受けとまどった。現役時代無活躍の私ごとき者が書くより活躍したOBのだからかふさわしい人にと想ったのだが、期限も迫っているし是非と言う事で、まあ小さい時から今日までの私の関係して来たスポーツ雑誌ならばと思いやつとペン執る事にした。

小さい時から、短距離より息の長い長距離の方が好きであった。近所の餓鬼大将に神社の回りを五〜一〇周も走らされた時、ほとんどの友達はいやがったが、私は何んとなくうれしかった。

小学校の運動会では、短距離は二〜三等で、五年の時初めての長距離(一、〇〇M)で一等になった。賞品の木製鉛筆箱は今でも大切に使っている。少年野球ではセカンドとキャッチをやったが、勝った記憶はない。当時は今程盛んではなかったが、食事中まで野球帽をかぶっていた。六年ころから休み時間・放課後

とよく相撲を取った。星取表もつけ、横綱・大関なども決めた。これは中学三年ころまで続いた。横綱になった時もあり二度程全勝優勝もした。また、村のお地藏様の草相撲などにもよく出て賞品などをもらい楽しかった。

中学では、陸上競技部と軟式庭球部に籍を置いたが、急造の排球部(九人制)のセンターを守られ中体連にも出た。陸上は、走高跳と二一〇Mハードルで、走高跳は全国放送陸上の県五位が最高であった。一一〇Mハードルは県予選で敗れた。冬は高崎市の駅伝にも出場した。

片岡中学校は当時黄金時代で、A・B二チームが一、二位を占めた。卓球部にも入部したが、台が一つで部員があふれ、一カ月でやめた。また弓は、近所に団体出場の弓好きのおじいさん(倉林さん)がいたので、二年の時入門し今日まで続いている(現初段)。

高々では、まず美術部に入ったが、やはり体を動かす事は忘れられなかった。そこで、個人競技ならばと陸上部にも入った。種目は一一〇Mハードルと八〇〇Mであったが、参加する事に意義があったと言う程度で、一一〇Mハードルの新人戦五位が唯一の入賞であった。八〇〇Mは、対前橋高校定期戦出場位である。練習は美術のテッサンが終ってからやつたり、陸上練習が終ってから電気をつけテッサンしたりという感じであった。それでも、大会が近付くと少し熱心になった。こんな程度の陸上部での現役時代であったが、細々ながら三年の最後の試合まで続けた。

大学では、軟式庭球部でわずかに汗を流していた。

さて社会に出てからであるが、種目だけまず羅列してみると、硬式庭球・剣道(馬庭念流)・弓道・登山・山スキー・水泳・卓球・マラソンと、一年中雨が降っても楽しめるレパートリーである。

硬式庭球は、最初の就職の時に会社の屋上で覚えた。その後高校(新島学園・藤岡工業)に就職してから生徒とやり始めた。今では、西毛では最初の新島で、男女部員六〇余名と一緒にやっている。その間インターハイ選手を引率したり合宿したりと、自分の果せなかつた夢を生徒に託すのもまた楽しみである。高々も硬式テニス同好会が出来たと言う事で、故清水善造氏(七回)の母校としての活躍を祈っている。

剣道(馬庭念流)は、二度目の就職の倉賀野小学校時代、道場を見学したのを切っ掛けに入門し、二四世樋口定広先生から指導を受けている。日曜日、ゆかりの道場で大声を張り上げての稽古は、寒中でも素足で平気でいられる。まだ太刀組目録と未熟だが、時には真剣で稽古などもあり、奥の深い守りの剣には魅力がある。吉井高校で念流クラブA・Bが出来、必須のAを先生の代りに作年まで二〜三の門人と指導した。私が剣道をやるなどとは思ってもみなかったが、古武道の面白みがそこにあるからであろう。

弓道は、中二から今日までかなり自己流でやって来た。護国神社の専用道場を使う様になってから礼の方も習った。初段になってから余りやっていないが、県

教職員講習会・全国指導者講習会にも参加、師範の適切な助言を大切に、今後習って行きたいと思っている。手の内を見せるな。そんなはずがない。など弓からの言葉であり、茶道の礼・動作にも通ずる一人のスポーツとしては中々雅味がある。

登山は、高校(新島・高々)の山岳部員と北アルプス・南アルプス(高々)・

昭和三十三年度 高々運動部活動状況

軟式庭球部

◇関東大会 土浦市(五三・六)

個人 山田 徹 藤岡 一回戦

吉江正樹 榎並 (東京・俊成学園高)

団体 (三年)

高々0—3 埼玉・松山高 一回戦

◇全国総体県予選 (五三・六)

個人 大竹敦之・原 敬 (二年) 三回戦

山田 徹・吉江正樹 (三年) 三回戦

原田佳幸・八木保光 (三年) 三回戦

浦野克彦・滝沢俊幸 (三年) 三回戦

団体 第二次予選 勝点2(Aブロック二位)

高々3—0 館林高

高々1—2 太田高

高々2—1 前橋商 ベスト4

八ヶ岳・飯豊連峰（高々）・西上州十石峠越え、美術部員と尾瀬燧岳にスケッチと言った具合から始めた。個人山行は、尾瀬が、○数回、北アルプス・南アルプス・谷川岳・八ヶ岳・富士山とスケッチをしながら行く安全登山である。また七年前に、ネパール・ヒマラヤのトレッキング（五、六〇〇m）に行った思い出は今でも新鮮である。あの黒く迫った雄大なエベレスト（現地ではサガルマタ・ヒマール……宇宙の深遠なる所の意）を眼前に見た時の圧巻は、胸を踊らせるのに十分であった。四五日間の東西のトレッキング中に触れた自然と人情は、今では一つの心のふるさとでもある。山男には、不思議とエベレスト征服者四人に会っている。ナワン・ゴンブ氏——インド人ガイド、世界で一人二度エベレストに立っている——には、丁度トレッキング前会い適切なアドバイスをして頂いた。アンツェリン氏——ネパール人ガイド、日本女ヒマラヤ・カラバートルにて

後ろにエベレスト



左：ノルバ（シェルパ）
(S47. 4)

性隊初登頂の時のシェルパ——は、富岡高校教頭小林二三雄先生宅で会った。私のエベレストのスケッチにサインをして頂き、お札に本人を色紙にスケッチして差し上げた。ライハルト・メスナー氏——用具に頼らず自分の足と手で本来の登山を実行している鉄人、ハーベラーと共に無酸素でエベレスト登頂に成功——は、単独エベレスト登頂は夢であると言っていた。また植村直己氏には三度会っていた。また平凡な人懐っこそうな中にもぴりつとした神経と不屈の精神力、熱っぽい行動力を秘めた目の輝きが印象的であった。昨年の奥利根源流調査隊との山行は楽しく、山のだいご味を十分たんのうした。山登りもますます続きそうである。

山スキーは、昨年高体連の講習会に参加、尾瀬戸倉スキー場からシールを付け富士見峠まで約四時間、新雪の中を駆け巡り白銀の世界のとりこになった。水泳は、小一の時に高々のプールに落ちてから覚えた。数年前、海の波まくらで寝るのを覚え、昨年、背泳を覚えて気を良くしている。後バタフライを覚えれば一応の泳ぎは出来る事になる。夏を楽しく過ごすためにも、今年もプールに海に出掛けて行くであろう。

卓球は、昨年辺りから少し熱を入れてやっている。基本の素振りを習ってから面白味が一段と出て来た。あらゆる機会と水曜日夜の練習（藤岡市民体育館）で、高一の部員位なら何とかやれる様になって来た。

マラソンは、フルマラソンが夢であるが、時間制限があり中々完走出来ない。

第八回群馬マラソンでは二時間三〇分三〇kmまで、三年前の青梅マラソン（三〇kmの部）では二時間三三分・二、〇六番で完走証を頂いた。また、第一回安政遠足（日本最古のマラソン復活約三〇km）で、安中から軽井沢の熊野神社まで旧中仙道をわらじ履き木刀を提げ、三時間二八分で走った。このスタイルで一番になり、週刊誌にも出た。週に一回、または月に二回程、夜中や早朝に走るだけである。こんな程度のランニングで、高校の全校マラソンに若返りの積りで参加した所、何度か一〇番以内に入った。現役時代より記録が伸びている。そんな折、今年は、母校の全校マラソンに二〇年振りの飛入り参加をした。シーズン近くになると、我が家（護国神社横）の前の坂道に足音がにぎわって来る。一度ホームグラウンドのコースに挑戦しようと思っていたが、日が取れず今年やっと実現したのである。結果は、六九位と現役時代とほぼ同じ順位であった。賞品の一升と川嶋尚武先生（四九回・保健体育科）の過分な講評には恐縮した。現役時代、故田中悦平校長（一七代）が、「グラウンドに一粒の汗でも落して卒業して行く者は貴重な経験だ」と話していたのを思い出した。マラソンと言えば、あの君原健二選手に偶然会う機会があった。勢多郡新里中学校に来た時である。一緒に軽く三km位走ってから講演を聞いた。どんな小さな努力も決してむだではない。一mでも多く一秒でも速くをモットーに走り続けて来たと言う努力の人のこの言葉は、謙虚で静かな人柄をより輝かせていた。

長々と書いて来たが、人生はよくマラソンレースにたとえられる。走り出した時のあの解放感、一汗後の爽快さ。自己の健康のために折に触れて走る事を生活の中に生かし、いつまでも高校生並の体力を持ち続けて行きたいと言うのが、今の夢である。

（六〇回・陸上部 新島学園講師 高々クラブ嘱託・陶芸）

◇一年生大会 神戸博幸・泰野和広 五回戦ベスト8 中村孝雄・島田好伸 四回戦ベスト16 丸山裕之・小林達史 四回戦ベスト16	◇新人大会 大竹敦之・原 敬（二年） 五回戦 神戸博幸・泰野和広（二年） 三回戦	個人 高々3——0 勢多農林 二回戦 高々2——0 桐生高 三回戦 高々2——1 高崎工 四回戦 高々2——1 高崎商 準決勝 高々1——2 吉井高 決勝	◇全国団体選抜大会関東予選 高々2——1 桐生工 一回戦 高々2——1 農大二高 準決勝 高々2——1 吉井高 決勝	◇全国団体選抜大会関東予選 高々1——2 千葉 千葉商大附属高 回戦
-------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------	---------------------------------------

矢島弘(四六回)・大島勝(四七回)の両氏でした。市川清先生(二・五回)・小鹿島堯先生の指導の下、佐藤実(四三回)・大山吉造(四四回)両先輩に鍛えられと言っても数カ月の練習で夏の大会に臨み、準々決勝は前橋中学校の校庭で対高崎工業学校戦18-12で勝ち、準決勝は忘れもしない物すごいかんかん照りの熱い日でした。敷島球場で対桐生中学校戦。激闘の末0-22で惜敗、本当にバスケットの試合の様でした。翌日の上毛新聞に「ジープと木炭車」と書かれ、憤慨した思い出があります。

以来三〇年余、高々野球部の悲願である甲子園出場がいまだに果されていません。現役の諸君、頑張つてその夢を実現して下さい。つたない文章でただ思い出すままに取止めのない事を書き連ねてみました。高々の発展と会員諸兄の御多幸を祈念致します。(四八回)

戦後初の県下優勝

持田 章

下山・三鷹事件が社会を震動させた昭和二十四年、新制高校が発足して二年目に、高々野球部は群馬の高球界をアツといわせた。市川清部長・佐藤義男監督(二八回)の下、戦争による冬眠から覚めよちよちしていたチームが、あれよあれよという間に県下優勝を果し、北関東大会準決勝進出という快挙をなし遂げたのである。

県大会一回戦で小泉農業高校に3-2で辛勝していた時には下馬評にも上らな

かったが、その後、伊勢崎工業高校・桐生高校を連破し、準決勝でも前橋高校を倒しての決勝進出だった。今では公園にもどっている前橋公園球場で、相手は富岡高校。捕手から転向し、後に専修大学で活躍した松本清志氏がエースとして登板。試合は、2-12で八回裏、無死満塁のピンチを迎えた。勝敗を決する重大な時。この時、合宿中に練習を積んだトリックプレーが成功し三塁走者を牽制で刺したのが切っ掛けとなって、試合の流れが変わった。延長に入つての一〇回表、今度はこちらが無死満塁で、バッターボックスは五番二塁手の怪力永井賢一氏。一振したバットからはじかれたボールは、左塁手後方の塀をはるかに越え、道路を隔てた知事公舎に飛び込むホームラン。狭い球場とはいえ、あれだけ飛ばせば文句なし。6-2のスコアで劇的な優勝を飾つたのだ。試合後、優勝カップで回し飲みしたサイターの味は今でも忘れていない。

- 6 峰岸 照久(五〇回)
- 8 堀江 宗夫(四九回)
- 3 笹原忠通郎(四八回)
- 1 松本 清志(四九回)
- 4 永井 賢一(四九回)
- 7 高橋 政雄(四九回)

北関東大会も同じ前橋で、本県からは県大会で準決勝に進んだ四校(高々・富高・前高・桐工)が出場した。一回戦で栃木・作新学院(高等部)を5-14で打破し、準決勝で強敵茨城・水戸商業高校と当たった。当方の先発メンバーは、次の通りだったと思う。

9 宮城 叶次(五〇回)
5 佐藤 太清(五一回)
2 原 仁(五一回)

主将は、後に東映フライヤーズに行った笹原忠通郎氏。私自身も、前任の大島勝氏・善如寺兌郎氏(四九回)からマネージャーを受け継ぎ、ダッグアウトでスコアブックをつけながら手に汗をしていた。

水戸商 0 0 1 0 0 0 0 0 0 0 0 2 3
高々 0 0 0 0 0 0 1 0 0 0 0 0 0 0 1

試合は、両投手の好投で延長に入った。一二回表、途中から右翼に付いていた鈴木秋雄氏(五〇回)の前に落ちた打球がイレギュラーして(ということにしておく)、外野の塀に達するというアクシデントがあり、走者の生還を許す結果となってしまった。

結局この年、水戸商は、決勝で桐工を2-1でくだし、甲子園に出場した。あれから三〇年、時代は変わった。当時活躍した佐藤太清氏を始め次代の川鍋順一氏(五二回)・境原武雄氏(五二回)など、御息を母校野球部に入部させ夢の実現を期待する年代になった。この間、残念ながら物故者となった方々も多く、改めて御冥福を祈る次第である。(五一回)

カットの写真

第二八回全国選手権大会県予選 準々決勝 (S二一・七・二四)



(五一回)

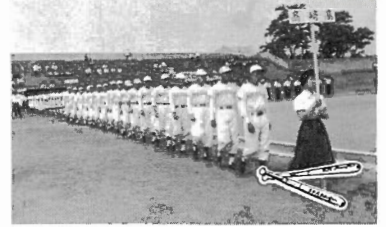
39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29
17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7
桐生	農大	桐生工	桐生	高崎商	桐生	富岡	桐生	前橋	高崎	桐生
16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6
桐生	前橋工	桐生	高崎工	桐生工	桐生	富岡	桐生	高崎	桐生工	高崎商
46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36
前橋工	桐生	前橋	桐生	桐生工	桐生	桐生	高崎	高崎	桐生	桐生

有限会社 高崎保安機材
代表取締役 早川 弘(五七回)

高崎市上並榎町二四八
電話〇二七三(六)九二〇

野 球 部

青春の絆 4



二勝の重み

北関東の闘い

細谷 崇

今から二〇年前の闘いを追想せよといふ。甲子園を目前にしなが、三塁に暴走し捻挫、決勝戦には出場すら出来なかつた「バカな細谷」に追想は酷ではないかと思つたが、自分なりに過去を振り返ってみよう。あの時のチームは、いいチームだった。当然皆の期待にそえる力を持つていながら、一瞬の俺のアクシデンツのためすべてを無にしてしまった大罪はここでは触れず、過去の思い出とか気の付いた点を述べてみたい。

はるかなる甲子園。とても手の届きそうにない甲子園は、果してそんなに遠いのだろうか。当時七連勝しないと行けなかつた甲子園は、確かに遠かつた。七連勝は、きつい課題だった。そのために、高嶺の花にあこがれる様な気持で練習していた自分を思い出す。望みを果すことは到底出来ないが、まあやってみよう

あの時、どうして気が付かなかつたのだろう。二勝すれば、甲子園だということ。俺達にとつて、その一勝は県大会においての桐高であり、もう一つの一勝は関東大会では山梨・甲府工業高校であり北関東大会では茨城・土浦第一高校だった。つまり、一勝は出来たが、二勝出来なかつたのだ。大会が始まれば七連勝が目的だが、県大会はいわゆる「お客さんチーム」がうじゃうじゃいる。自分達より下のチームは何百校いても関係なく自分達と同格、あるいはやや上のチームに二回勝てば甲子園なのだ。関東大会決勝で甲府工に敗れ、北関東大会決勝で土浦一高に敗れた時、初めて気が付いた。甲子園への道は「どんぐりの背比べ」なのだ。もし甲府工や土浦一高に緒戦で当つていたら、軽く一しゆうしていただろう。俺達はいつも決勝戦の重さにつぶされたのだ。初めての秋の優勝を争つた伊勢崎高校(現伊勢崎商業高校)は、延長で2-1。この優勝で出場権を得た春の関東大会決勝では、甲府工に延長1-2で敗退。夏の大会は、桐高を軽々破つておきながら、決勝の富高には1-0で辛勝。北関東大会では、1-6で土浦一高に敗れた。あのすばしっこい高々が、決勝戦になるとどうしても一点しか取れなかつたことに注目して頂きたい。甲子園の経験豊富な桐高なら、すんなり行つていただろう。俺達は、未踏の甲子園の重圧、決勝戦の重さにつぶされたのだ。首脳部の願望と激情に、選手は萎縮させられた。

関東大会決勝一回裏二死二塁で、甲府工の四番打者狹野を迎えた時、敵の監督がベンチに狹野を呼びパチンコの球を見せつけた。きつと、「こんな時ヒットを打つなんてパチンコの球が入る位の確率しかない」といつていたのだらう。見事センター前にポテンを打たれて敗退した。

これと同じ様な現象を、一年の時かいま見たことがある。夏の大会で、俺達は補欠のため、城南球場のファウルボール拾いをしていた。しかし選抜大会準優勝の桐高チームがどうしても見たくて、桐高ベンチ側で観戦していた時のことだ。

北関東大会で、稲川監督が、バッターを呼んでバントの仕方を教えているのを見て愕然とした。「お前はバントをするのだぞ。お前はセーフになつてはだめなのだぞ」と教えているのだ。実力以上のものは望まないが、持てる力を発揮させる稲川野球に震え上つたものだった。

高々の歴代監督の悪口をいつているのではない。しかし、稲川のごとく、クルな目で戦況が見える監督が是非とも必要なのだ。今も、付きや僥倖に頼らない自己をわきまえた監督の誕生を心から待ち望んでいる。

ここで、県大会での一勝、北関東大会での一敗について触れてみたい。

桐高との一戦は、絶対に勝てる自信を持っていた。若山亨(五八回)が練習試合で桐高のクリーンアップをころころとやつつけているのを見て、沈むボールには全くだめなチームの感を持つていたからだ。しかし、彼らも大会までに力を上

48	47	46	45	44	43	42	41	40	和昭
26	25	24	23	22	21	20	19	18	回 秋季関東大会
農大二	農大二	高崎商	前橋工	農大二	育英	前橋工	桐生	前橋工	県代表
25	24	23	22	21	20	19	18	17	回 春季関東大会
高崎	育英	高崎商	上武一	高崎商	桐生商	前橋工	桐生	前橋工	県代表
55	54	53	52	51	50	49	48	47	回 全国選手権
前橋工	桐生	高崎商	前橋工	高崎商	前橋工	前橋商	前橋工	農大二	北関東大会

群馬の高校野球

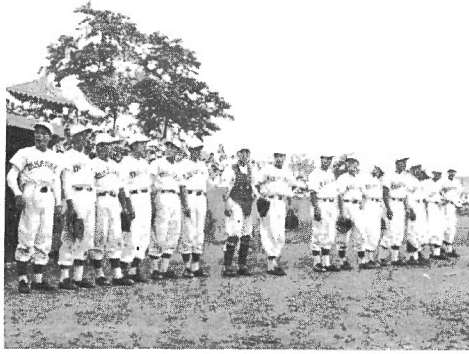
その二

代表取締役
高崎中央ビーエスタイヤ株式会社

皆川 淳 一 (一五七回)

高崎市下豊岡町一・一五
電話〇一七三(二二)七五五五

ブリヂストンタイヤ特約店



第39回全国選手権大会県予選 (S32・7)

げていた。俺の沈む球をことごとくジャストミートし、猛ゴロを打ち続けた。県内随一のショートといわれながら神宮大会でこてんこてんに新聞にたたかれ、ノエラーを誓った本多饒(五七回)は、これをことごとく取り続けた。前橋工業高校戦で右手裂傷を負い欠場していた田島宏樹(五七回)は、この桐高戦のみ出場し、到頭稲川をして一度も盗塁のサインなしに終らせた。結果は、やはりすんなりの勝利だった。

しかし、北関東大会は違っていた。優勝問違いなしといわれた茨城・水戸第一高校を7-0で破った時から、重苦しい雰囲気にも包まれ始めた。次の栃木・宇都宮商業高校戦での俺の暴走・捻挫は、更に各選手の余裕を奪ってしまった。なぜ、あんなに戦況が見えなかったのだろうか。北関東大会は、どنگりの背比べだったのだ。主審の勝出はいっている。「他の

チームと比べて、高々は、圧倒的な強豪であった」と。これを俺達は知らなかった。知っていたら、慌てて点を取りに行かぬ。六・七回までじっくり待って、相手の乱れを待つ。丁度桐高戦の様に、データを見れば、水戸一高・宇都宮商の二試合で、単打を七本打たれただけの完べきな守を誇っていた高々なのだ。「お前達の方がずっと強い」といつてくれる首脳部が一人でもいたらと悔やまれる。俺の捻挫がすべてをだめにしてしまったことは事実であり、高々関係者に一生わびてもわび足りないことは分っている。大きなミス深く恥じてはいるが、もしこの言葉を許してもらえのなら、野球部指導者ももっとクールに甲子園を考えたらどうだろう。俺のいいたいことは、「こころい」という闘いを二勝すれば甲子園に行けると言うことだ。七連勝などと考えるから萎縮してしまうのだ。

今、後輩にいいたいことがある。へたばるまでやる猛練習もいだろう。しかしそれは、当然皆がやっていることで、全く甲子園に近付いていないのだ。その上の努力、すなわち、家に帰ってからの一回々々の素振り、ボールを縫う一針々々、マラソンの一歩々々の鍛練。こういうことが、確実に甲子園に近付いているのだ。この目に見えぬ努力が、自分の努力を試合に発散したいと思う心につながるのだ。決して自分の力以上を望まないことが、落ち着いたプレーを生み出す。この努力がなければ、自分の力を出し切れることを考えず、「何とかうまく行ってくれる様に」という願望に変わってしまう

のだ。

小さなつまらないに見える努力が、ミスの少ないチームを作って行く。俺達が今のグラウンドで今の物品豊かなチームだったら、案外二回戦迎いでころりだったのではないか。ガーチャンのあの有名な言葉、「ボールも無い。バットも無い。ただあるのは選手の手と足のみ」。俺達も、一時は全く期待されない。見捨てられたチーム。だったのだ。勝ち続けるには、守のチームしかない。捕手の田島が、ファウルチップを捕ろうと不可能に近い努力をしていた姿。一塁の吉田泰延(五七回)が、数人に暴投を投げてもらい、捕球してからのベースタッチを練習していた姿。遊撃の本多が、イレギュラーのない様にグラウンドをならし過ぎて、雨の日はいつもショートが池になっていたこと。だれにいわれた訳でもない。あれがあつたチームの財産だったのだ。二・三・四番を打った俊足・豪打の須郷東一郎・竹内功・田村毅(五七回)の外野トリオ。あの猛練習をやつたのに、「練習が足りぬから夏へばるのだ」と俺に食って掛かったマネージャーの飯島勇(五七回)。皆懐かしく思い出すが、悲願を達成出来なかった自分の不明を心よりわび追想の記としたい。

最後に、今のチームでも絶賛に値する人がいる。久し振りに復活した冬季のバツティング練習が、いつまでも続く様に願っている。(五七回)

カットの写真
第三九回全国選手権大会県予選
開会式 (S三二・七)

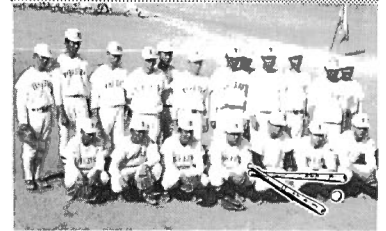
カー用品
タイヤのデパート
オートバザール
キャバリーノ株式会社
代表取締役
皆川 淳 (一五七回)

一号店
高崎市大八木町一七五〇
電話〇二七三(六三)二五〇〇
二号店
高崎市岩押町一〇一
電話〇二七三(二七)三三二八〇

考	備	54	53	52	51	50	49
○	優勝	31	30	30	29	28	27
		農大	前橋工	富岡	前橋	高崎商	高崎
○	優勝	31	30	29	28	27	26
		前橋工	桐生	富岡	前橋	富岡	農大二
							太田工
※	優勝 (出・県校)	60	59	58	57	56	56
		桐生	富岡	高崎商	樹徳	前橋工	前橋工

野 球 部

青春の絆 4



高々野球部を顧みて

中村 康晴

私が高々に入学する前年、昭和四十五年の夏の大会の事である。中学でも野球部に籍を置いていた私は、高校野球というものにあこがれ大変興味があった。試合結果は、テレビ中継も無かったので、次の日の新聞を見て知る事が出来た。私は、大会の期間中、毎朝スポーツ欄を見る事が日課となっていた。ある日の新聞に、「高々ベスト8へ」の大見出しと、黒縁の眼鏡をつけた選手が土煙と共にホームにヘッドスライディングをしている写真が載っていた。その記事を見て至極感動した事を、八年経った今でもよく覚えている。

さて、入学した昭和四十六年。夏の大会で、シード校であった高々は、石田投手(元阪急)の率いる上武大学附属第一高校に代表決定戦で敗れ涙を飲んだ。当時の部員は一三名。この大会を最後に五名の三年生が抜け、そして二年生一名・

一年生二名が退部をしてしまった。残りは、二年生二名・一年生三名である。その年の夏の練習は、個人ノック・走り込み・ピッチングだけで終ってしまつた気がする。

その五名で何とか冬を越すと、待ち遠しかった新入生が入部して来た。前年の夏の大会でベスト4に進出したせい、その数も一〇名と当時では珍しく多かった。私が二年生の夏の大会は、一・二回戦と圧勝し、準決勝で高崎商業高校と対戦した。追いつ追われつゲームの内容となり、九回裏一死まで3-2とリードしていたが二点を奪われ逆転負け喫してしまつた。この事が刺激となり、その年の夏の西毛リーグで一〇年振りの優勝。

そして、来年に向かつての冬季練習がやって来た。保健体育科の小林薫先生(現高崎女子高校)の指導の下での練習は、今考えても大変厳しいものであった。小林先生が、片手にむちを持ち、少しでも走るのが遅くなるとあの長い足をフル回転させて後方からむちを振り回すのだからたまつたものではない。腹筋・腕立ての時でも同様である。私達は、体が慣れるまで自転車に乗る事が出来ず、押して帰る日が続いた。

この様な冬季練習をして来て、私が三年生の春の大会で一七年振りの優勝という喜びが味わえた。一回戦中央高校に8-2、二回戦利根商業高校に8-7、準決勝勝館林高校に5-2と勝ち、決勝で前工に全員安打の一六安打で10-4と打ち勝つた。一時は五名しかいなかったチ

ームで、当時でも三年生が捕手の加藤千景、一塁手の鈴木一弘、投手の私と三名だったチームがここまで来られたのも、高々ならではのチームワークとやる気があつたからだと思う。

さて、私が高々時代で最も印象深かつた春の関東大会である。山梨・甲府市で行われたこの大会には、野球の名門校が集まり私達の戦いに対しての意欲を一層盛り上げさせた。一回戦は、地元の甲府商業高校と対戦した。1-0で勝ちました。私にはマウンドから見た甲府商の応援団席が肩を組み合い揺れ動いている様に見えとても恐ろしく感じた。そして二回戦は、江川投手(現巨人)の作新学院と対戦した。さすがに、彼の球は速くそして伸びがあつた。練習でピッチャープレートから5m前で投げさせて打つてはみたが、その球とは威力が違い残念ながら手も足も出なかった。五回まで安打は私が放つた一本で、一一の三振を奪われという始末であつた。0-7と敗れはしたが、OBと成つた今ではいい思い出である。

最後に、私事となるが、卒業して六年



第25回春季関東大会 県予選 (S48・4)

目を迎える今でも野球を捨て切れず、高崎信用金庫野球部に籍を置いている。高々時代の経験をフルに活用し、天皇杯・国体を目標に、高々野球部OBとして最善を尽くす心算である。(七三回)

翠 樹 体 育 会

総 会 報 告

昭和五十四年度

副会長 石井 清一

昭和五十四年度翠樹体育会総会は五月二十五日(金)、レストラン・タカシマヤローズ(高崎市常盤町)において、母校から滝上豊太郎教頭先生を始め各部顧問一五名、会員五〇名余の出席を得て盛大に行われました。

総会は、議長に反町定夫氏(五〇回・バスケット部)を選出し議事に入りました。昭和五十三年度行事報告・会計報告が無事承認された後、五十四年度行事計画・予算案の審議に移りました。今年度は、特に母校各運動部の好成績が予想され関東大会や全国大会等に出場する部への餞別も大幅な増加が見込まれるため、執行部より会費(各OB会負担金)の値上げが提案されましたが、会員各位の後輩を思う暖い御理解を頂き原案通り承認されました。行事面では各OB会の横の連携強化を深め様との試みで各OB会対抗ゴルフ大会等も計画され、めでたく総会を終了する事が出来ました。



甲子園への道を

岡村 武彦

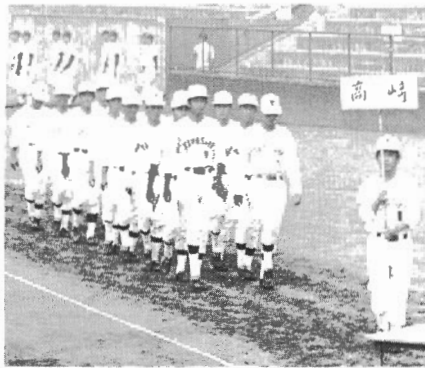
昭和四十六年、私が高々へ入学した前年の高々野球部は、夏季大会でベスト4に進出、準決勝では惜敗したものの優勝候補筆頭の上武一高を大いに苦しめると言う大活躍を演じました。私は、その事をテレビで見て新聞を読んで、高々野球部にあこがれ先輩達の姿にひかれ、その中に自分をダブらせ高々へ入学出来たら是非入部したいと願っていました。私の様な考えが多かったのか、この期の部員数は他より多い様です。

それだけでも得る所は大きいのに、私はラッキーな事に大会で良い成績を残せました。一年の時は、三年生が市川俊宏・須賀晃さん(七二回)、二年生が加藤千景・鈴木一弘・富沢優・中村康晴さん(七三回)、後は一年生と言うチームで、強い時代の高商を苦しめベスト8。二年の時は中村さんを中心にした大型チームで、春季大会は県優勝、関東大会であの江川の作新学院とも対戦出来て関東ベスト8となりました。三年の時は打のチームで、夏季大会はくじ運にも恵まれ北関東大会準優勝。秋季大会では、後輩

達が猛打で県優勝をもち取り、最盛期の神奈川・東海大学附属相模高校と互角の勝負を演ずるなど、甲子園に後一步の所まで何度も経験出来ました。OBとなったいま、当時の本多鏡監督(五七回)にしごかれた事、急に怒り出す高橋正親先生(社会科地理)のノック、顔を見るのもいやだったOBの人達のしごきも、私達のため、高々野球部を強くして甲子園へ送り出したためであった事が痛切に分り、敗戦の後の雨中のランニングも車のライトを使つてのノックも楽しく良い思い出になっています。心残りと言えば、やはり甲子園です。甲子園だけです。現在OBとして余りバックアップが出来ていないので恥しい限りですが、永い歴史の中で先輩や私達が到頭なし遂げられなかった甲子園へ一日でも早くと後輩達に奮起を促し、またOBとして出来る限りバックアップしたいと思つています。私の同級生——強気々々の斎藤淳嗣、前工の向田(現早稲田大学)に強い田村嘉也、フラインゴ打法の的哲也、盗塁成功率一〇割、牽制アウトのチーム一多かつた大沢比呂志、思わぬ大きいのを打つ佐藤信雄、オールラウンドプレーヤーの馬場克美、そしてエライすると絶対得点に結び付いたキャプテン長谷川稔——、野球部OBすべても当然そう思つているので、無断ですが私が代表しておきます。一日も早く高々を甲子園へ!! (七四回)

昭和四十六年、私が高々へ入学した前年の高々野球部は、夏季大会でベスト4に進出、準決勝では惜敗したものの優勝候補筆頭の上武一高を大いに苦しめると言う大活躍を演じました。私は、その事をテレビで見て新聞を読んで、高々野球部にあこがれ先輩達の姿にひかれ、その中に自分をダブらせ高々へ入学出来たら是非入部したいと願っていました。私の様な考えが多かったのか、この期の部員数は他より多い様です。

それだけでも得る所は大きいのに、私はラッキーな事に大会で良い成績を残せました。一年の時は、三年生が市川俊宏・須賀晃さん(七二回)、二年生が加藤千景・鈴木一弘・富沢優・中村康晴さん(七三回)、後は一年生と言うチームで、強い時代の高商を苦しめベスト8。二年の時は中村さんを中心にした大型チームで、春季大会は県優勝、関東大会であの江川の作新学院とも対戦出来て関東ベスト8となりました。三年の時は打のチームで、夏季大会はくじ運にも恵まれ北関東大会準優勝。秋季大会では、後輩



第55回全国選手権大会県予選 (S48・7)

カットの写真

第二五回春季関東大会県予選

(S四八・四)

総会の後は直ちに別室で懇親会に移り、酒盃を傾け合いながら、ある者は旧交を暖め合ったり、また各部現役の今年度の活躍に思いをはせたり、和やかに語り合いました。宴もたけなわになった所で応援部OBのリードによる恒例の『翠巒』が肩を組み合い声高らかに斉唱されるころには、参会者の気持は皆一体となり最高の盛り上がりを見せ、翠巒体育会の存在意義は正にここにこそあるんだな之感を今更ながら深くさせられました。午後六時から始まった総会も、名残りを惜しみつつ九時三分お開きとなりました。(五七回・柔道部)

家具の塚越

有限会社

塚越家具店

専務取締役

塚越 勝 男(五九回)

高崎市大橋町一〇四
電話〇二七三(三三)四一七一

冷暖房工事・電気工事

アラキ商会

荒木 厚生(六〇回)

高崎市上並榎町五〇三一七
電話〇二七三(六二)六一一八

アルピנקルスの

思い出



黒岩達介

それは確か一九六六年(昭和四一)五月、場所はオーストリア・チロル州にあるオエツアルアルペン(三、八〇〇m級の山々が連なる)で行われたアルピנקルスに参加した時の事である。アルピנקルスとは、氷河地帯における登攀とスキー滑降の実地訓練で、オーストリア国家検定スキー教師になるための必須課題の一つである。

その日、私達のパーティは、五人編成で二班に分れ、午前四時に行動を開始し、目的地のリーベナーシュピツェ山を目指して快調なピッチで登っていた。氷河地帯に入ってから全員がアンザイレンシ、トップのリーダー、ヨセフの慎重なルー卜工作で難所を三時間掛けて突破すると、比較的平たんな幅広いカールに出た。そこからは、リーベナーシュピツェの山頂がそそり立って見えた。私達は歩調を早めて黙々と進んで行く。しんがりを務める私は、アンザイレンされた仲間が同間隔を保って登って行く光景を時折見上げ

ては、その歩みに力強いものを感じていた。

その時であった。私が握っていたザイルが伸びた。ふと見ると、私のすぐ前を歩いていたハインツが前のめりに倒れている。それどころか、リーダー以外に立っている者はいない。彼に続く仲間は頭を下に向けて倒れ、真中を歩いていた巨体のシュタイナーの姿がない。そんな私に、「シユネーブリュツケ(クレパスに掛った雪の橋)だ。早く確保しろ！」とリーダーが怒鳴った。私は、ビツケルやスキーを雪に鋭角に深く差し込み、意外な程早くザイルを固定した。だが、ぽかんと明いた穴を見て、自分が身構えていた足場が急に不安になり、足がすくんでしまった。リーダーは、さすがに冷静であった。うろたえる私達に、「よし、掛声と一緒に引き上げるのだ」と命じた。私達は、自分自身にも勇気付ける掛声に合わせて、雪に深く食い込んだ重いザイルを引いた。双方で一mも引き上げ時であるうか、うめき声を張り上げながら落ちたシュタイナーが暴れ出した。私達は、その悲壮な声に緊張した。生きていた。だれもが勇気を取りもどし、更にザイルを手練った。その時、ガバツノという無気味な音と共に雪煙が舞上がり、ザイルがびんと張って私の肩に強く食い込んだ。立ち込める雪煙が静まると大きなクレパスが青黒い口を明け、今や私達の力を上下に分断し、五人のうち三人までをその中に飲み込んでしまった。もはやリーダーと私ではどうにもならない状態に追い込まれたと、私は直感した。

私達は、もう一班の仲間が教官のミツヒェルの姿がどこかに見えないかと周囲の峰々を見渡したがその姿はなく、大声でミツヒェルの名前を叫び続けたがむなしくこだましか返ってこなかった。沈黙の中、対岸で必死にこらえるリーダー。私は彼より条件の良い所にいたが、じりじりと肩に食い込むザイルの苦痛と重力に耐え難く絶望的な状況に瀕していた。私は、もうだめかと思う。いや、何としても生きなければならぬ。しかし、何の手立てもない悲壮感は、絶望の底に私の振り絞る力をそして精神力をむなしく落し入れて行く様に思えた。

私は、そんな中で、いつか読んだアルフォンス・ドーデの「アルプスのタルタラン」の一節を思い出した。「いかに強靱なアルピニストでも、生死を分ける極限状態に陥れば、ビツケルでザイルを切っても自分だけは助かりたいと思うのは確かである」という人間肯定論であった。しかし、次の瞬間には、「アンザイレンする事は、そもそも生死を共にする



万座温泉スキー場にて(S 54.2)

道義的な契約をしたのも同然である」というもう一方の否定論でこれを打ち消した。私は、肯定・否定両論が交互に交錯する中で、ふと長兄(黒岩利治・四六回)が冬山遭難救助のために生命を奪われた悲壮な事故に泣く父母の光景が鮮明によみがえって来た。するとまた、このままでは絶対に死にたくない、ザイルを切っても生きなければと思った。だが、そこまで私の思慮が進展しても、現実的な分別がこれを制してしまう。もし仮に私がザイルを切れば、私以外の四人はすべてオーストリア人であり、その行為は一人の日本人の個人的な道義責任、あるいは不名誉にとどまらず日本民族の屈辱にもなる。死ぬ時は一心同体だ」と自分自身にいきかせ、抗しきれないザイルの圧迫に意識も減退し、次第に幻覚の世界へと引きずり込まれて行った。

どの位時が経ったのであろうか。一群のスキーヤーが、もうもうと雪煙を上げて、私達に近付いて来た。私は、いまだにその時の事が、幻の様にとしか表現出来ない。とにかく私達は、教官と他のパーティによって九死に一生を得た。その時の感激は、正に筆舌に尽し難いものであった。だが、我に帰ったその瞬間、私は氣を失わんばかりに驚いた。私の手には、いつの間にか握られていたナイフがあったからである。もし救助隊がわずかも遅れて到着していたらと思うと、背筋が凍る思いがした。人間の運命というもの、全く紙一重であると痛感している。

(五二回・サッカ部)

万座スキー学校長)

第三二回

高々・前高定期戦



奇跡の大逆転

定期戦を終えて

実行委員長

割田 誠也

第二二回対前橋高校定期戦は、例年勝ち越していた一般対抗が大敗したにもかかわらず、昨年負け越した部対抗が圧倒的な強さを見せ、結局68-61と言う点差で勝利を収める事が出来ました。

九月二十九日(金)朝から空模様が悪く開会式も雨中で挙行するなど天候には恵み激闘の綱引 (S五三・九・二九)



まれませんでした。雨天で中止になった水泳を除き、予定通り無事終える事が出来ました。

今年の戦いを振り返って見ると、一息つく暇もない位、苦しい戦いでした。午

前中大体の一般種目を終えた時点で前高に二〇点近くリードされ、残された部対抗においては一つも敗けられないと言

高々・前高定期戦

得点表

	高々		前高	
	一般	部	一般	部
陸上	3	0	6	6
バスケット	5	0	4	6
バレー	5	6	4	0
庭球	6	6	3	0
卓球	1	6	8	0
駅伝	0	/	9	/
綱引	3	/	6	/
水泳	中止	中止	中止	中止
ラグビー	/	6	/	0
サッカー	/	3	/	3
体操	/	6	/	0
剣道	/	6	/	0
柔道	/	0	/	6
野球	/	6	/	0
小計	23	45	40	21
総計	68		61	

(高々16勝12敗3引分1中止)

挙げられます。それに比べ部対抗の圧勝については、県高校総体総合三位と言う実力を前高に示し、その中でも野球・体操・卓球の善戦が勝利に大きく影響したと思います。

その他特に気付いた事を書きますと、高々生のマナーの悪さ、前高に比べ応援が下手なのが目立ちました。前高の実行委員長を始めとし色々な人の話の時「シ」を発し、エール交換においては自校の応援に対しても声小さく前高を応援する時は声も出さなければ拍手もしないと

来年、前高は巻き返しをねらって全力を出して来るでしょう。しかし来年こそ、全貌整った高々の地で、一般対抗・部対抗はもとよりすべての面において高々本来の力を発揮して、真の定期戦の勝利を勝ち取る事を心より希望します。

修道館石井柔道場

石井 清 一

群馬郡榛名町中室田九六

群栄化学工業(株)

勝 俣 務

高崎市菊地町一八〇 (相撲)

東京農業大学第二高校

岸 泰 徳

群馬郡群馬町足門 七・九一九

司法書士

木 村 忠 男

高崎市下和田町 四一五一一四

日本電々公社

白 石 視 美

群馬郡群馬町金古 五九四一一

千倉書房

塚 越 俊 治

高崎市竜見町一二五

榑大林組

三 浦 俊 郎

柏市東山一五一一〇

柔 道 部 5 7 回

昭和53年度 高々運動部活動状況

第13回県高校総体(S53・5)

入賞校 (男子)

総合成績 (男子)

Table with 7 columns (種目, 成績, 1位, 2位, 3位, 4位, 5位, 6位) listing various sports and their winners.

Table with 7 columns (1位, 2位, 3位, 4位, 5位, 6位) showing overall scores for various sports.

※水泳(53.8)・駅伝(53.11)・スキー(54.1)・スケート(54.2)を除く

○バスケット部
高々81-45桐生高 2回戦
高々86-62藤岡高 3回戦
高々81-68桐生工 4回戦
高々62-46高崎商 準決勝
高々69-41前橋商 決勝

○バレー部
高々2-0中央高 4回戦
高々2-0桐生工 5回戦
高々0-2桐生商 準決勝

○卓球部
高々3-1万場高 2回戦
高々3-2藤岡高 3回戦
高々0-3前橋商 4回戦

○ラグビー部
予選リーグ 6勝(Cブロック1位)
決勝トーナメント
高々25-4前橋高 2回戦
高々3-4中央高 決勝

○柔道部
高々3-1伊勢崎商 2回戦
高々2-2農大二高 3回戦
(内容敗)
高々0-3藤岡高 敗者復活1回戦

○柔道部相撲班
(団体) 勝率5・勝点23
高々4-1桐生商
高々1-4農大二高
高々4-1大間々高
高々5-0勢多農林
高々5-0中之条高
高々5-0樹徳高
(個人)
中野 昌明 ベスト8
高橋 弘幸 ベスト16
関 栄一 ベスト16

○軟式庭球部

(個人)
山田 徹・吉江 正樹 4回戦 ベスト16
原田 佳幸・八木 保光 3回戦
大竹 敦之・原 敬 3回戦
浦野 克彦・滝沢 俊幸 3回戦

(団体)
予選リーグ
高々3-0育英高 2回戦
高々2-0利根商 3回戦
高々2-0前橋商 4回戦
決勝リーグ
高々3-0農大二高
高々2-1太田高
高々2-1高崎商

○サッカー部

高々1-0渋川高 2回戦
高々2-0藤岡高 3回戦
高々0-2高崎商 4回戦

○剣道部 本/勝

高々4/2-4/3伊勢崎東高 2回戦

○水泳部 得点69

100m自由形
須藤 聡 1分01秒2 2位
斉藤 政宏 1分04秒0 3位
須藤 聡 2分19秒2 4位
石田 鉄光 5分19秒6 4位
美細 津正 5分33秒5 5位
100m平泳
小川 淳 1分21秒8 3位
石井 克明 1分22秒8 4位
石井 克明 3分04秒4 5位
小川 淳 3分08秒0 6位
100mバタフライ
糸井 良弘 1分13秒6 4位
糸井 良弘 2分56秒4 2位
美細津 正 3分19秒2 5位
石田 鉄光 1分18秒6 3位
倉林 武美 2分53秒6 3位
倉林 武美 2分44秒4 4位
斉藤 政宏 6分58秒4 4位
400mリレー
高々 4分15秒8 1位
800mリレー
高々 9分50秒6 3位
400mメドレーリレー
高々 4分53秒0 1位

先輩、頑張ってます

現役の活躍



全国高校総体に出場して

バスケット部

渡瀬 英俊

昭和五十三年全国高校総体のバスケットボール競技は、山形市で厳しい予選を勝ち抜いて来た精鋭六四チームが参加して開催されました。

我々は、「今年のチームは力不足」という前評判を覆して、二年連続九回目の出場を果たしました。前年の松江インターハイ以後、山形インターハイを目指していたので、県予選の準決勝・決勝ではポイントゲッターの負傷にもめげずチームワークで勝利を収め、念願の出場権を得る事が出来た事を大変うれしく思っています。これも、顧問の川嶋尚武先生（四九回・保健体育科）の御指導、OBの方々の物心両面にわたる御支援のお陰と感謝しております。

七月三十一日八時、川嶋先生率いる高々バスケット部二三名は、一路山形へと向かいました。一四時半ごろ山形駅に着すると、先発の猪俣元昭先生（理科化学）と部員二名の出迎えを受けました。早速一七時から山形東高校体育館で練習をしたのですが、始めると間もなく福岡・小倉高校のコーチが偵察に来たので皆わざとシュートを落すなど、ちよつとおかしな練習でした。

八月一日、山形南高校体育館で練習をしました。一六時から開会式です。周閉にはやたらと大きいやつがいて、まるで一般の部に入った様でした。役員や地元高校生のおいさつが始まり、全国の仲間達がカラフルなユニホーム姿が集まったのです。熱気が満ちあふれていました。

八月二日、午前中、山形南高校体育館で練習。皆体が軽く調子がよさそうでしたので、一時間半程で切り上げ宿舎で休みました。

一五時、会場である山形商業高校体育館に向かいました。その日の山形市は、最高気温三八度を記録、戦後四番目の猛暑であったそうです。アップを終え、いよいよ試合開始。相手は小倉高で、一九二・一八七という長身者をそろえていました。高々は身長差をカバーすべくマンツーマン、小倉は2・3ゾーンでスタート。前半、七分で12-16とリードされましたが、その後入れ合いとなり、高々のフオーワード陣二人がミドルを決めれば、相手は長身者にボールを集めて得点します。前半は43-45で終了。

後半は、高々に疲れが見えミスが多くなり、八分には53-65と離されました。一〇分からオールコートプレスに出ますが、逆に二人退場して万事休す。71-91と敗けてしまいました。

敗因としては、何とんでも身長差が挙げられます。試合後のミーティングでは、猛暑の中、最後まで全力で戦った事をたたえ合いました。四日に帰る予定のため、三日は自由行動とし山形での一日を楽しみました。インターハイに出場した事は、我々にとって一生の思い出であり、高校時代の一つの勲章だと思います。これからはOBの一員として、部や高々の発展に微力ではありますが協力したいと思います。



◇全国高校総体

バスケットボール大会の戦績

県予選

(五三・六)

高々101 — 41樹徳高 二回戦

高々124 — 31高崎工 三回戦

高々75 — 47太田高 四回戦

高々63 — 33高崎商 準決勝

高々92 — 40前橋商 決勝

全国大会 (五三・八)

高々71 — 28 43 — 46 45 — 91 小倉高 一回戦

昭和五十三年 高々運動部活動状況



バスケット部

◇関東大会

Aブロック 宇都宮市(五三・六)

高々58 — 22 25 — 36 38 — 63 東京 中央大付属高

◇団体県予選

(五三・七)

高々80 — 88 富岡高 一回戦

◇強化大会

高々114 — 33 大泉高 二回戦

高々65 — 37 高崎工 三回戦

高々72 — 38 中央高 四回戦

高々55 — 40 前橋高 準決勝

高々62 — 44 太田高 決勝

◇新入大会・全国選抜大会県予選

(五三・一一)

高々106 — 42 利根商 二回戦

高々107 — 42 桐生高 三回戦

高々100 — 43 前橋商 四回戦

決勝リーグ

高々72 — 63 桐生工 (五四・一)

高々66 — 50 前橋高

高々80 — 39 太田高 一位

◇全国選抜大会関東予選

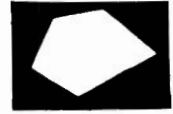
土浦市(五四・二)

高々62 — 3 35 — 9 45 — 80 茨城 土浦日本大高

一回戦

踏 跡

今年の反省 その1



目で感じ、頭で考え、
体で覚える!!

体 操 部

大山 俊夫

本県における男子体操のレベルは、全国上位にあると言ってよいだろう。それは、一昨年高崎工業高校が全国制覇をなし遂げた事からも分るはずだ。しかも、県内での上位争いは激しく入賞する事は確かに難しい。しかし後輩よ、俺達は、君達の若いパワーに期待している。新任の山口富士生先生(保健体育科)と共に、いつの日か高工に追い付く事を期待している。

しかし、何せ相手は全国一位である。一朝一夕で倒せる相手ではない。体操競技は、日々の練習こそが試合の時の自信となり力となるものである。また、体操は、マッチ・ゲームではない。それは自

分との戦いである。その点で、他の競技とは一味違った物であると言う事が出来るのだ。

考えて欲しい。君達は、大変恵まれているのではないか。試合で高工の素晴らしい演技を眼前に見る事が出来るではないか。体操は、目で見て感じ、頭で考え、体で覚えるスポーツである。時には、頭の中で演技をしてみる事も大切だ。友人と欠点を話し合う事も大切である。体操は、見せるスポーツだと言う事を忘れないでほしい。

色々と言って来たが、注意としてもう一つ。今日は何をやるのかをはずりさせ、着実にやる事だ。では、目標は高く持ち、それに向かって精進して欲しい。

後輩よ、何よりも細心で、且つ大胆であれ!!

自信を持つて

新しいスタート

硬式テニス同好会

林 良成

あれは、丁度僕が二年の夏休に入る二、三日前だったと思う。そのころ、僕は前橋の某テニスクラブに入っていた。そこで僕は、一人の高々生に会った。彼は、「高々にも硬式テニス部を造らなければならぬ」と語った。

そして二学期、硬式テニスの活動が生徒会に認められて始まった。あれからも一年半以上経った。その間には、僕だけでなく、皆にも色々なことがあっただ

ろう。時には色々なことを言われたし、時には暴発もした。しかし、今となっては皆遠い過去の出来事のように思える。悔やんではないし、また悔やむ様なこともしなかったと思っている。時はいつも動いている。これからは、前だけを見て進んでみよう。何かがあるかはだれにも分らないし、分っていないはつまらない。試合で自分より弱い相手に敗けることだつてあるかもしれない。そんな時は、悔やしくて悔やしくてたまらないだろう。だが、それを乗り切れば、自分と言うものに自信が付くにちがいない。

「自信」……自らを信じること、言葉で言うのは簡単だが、自信を持つことは難しい。高校三年間で、自分の人生に自信を持つことは出来ないだろう。その代り、高校生活は恥と言うものをくれる。恥をかくと言うことは、だれだつていやなものだ。出来れば、一生恥をかかないで過したいたいと思っている。しかし、それは無理だ。だからこそ、自信を持つことは大切なのだ。生きるのは、他人でなく自分なのだ。他人を気にするな。目をいつも未来に持って行き、心を無にして生きて行くこと、これを僕は望む。

青春の一ページ

野 球 部

鈴木

弘康

時の流れは早いもので、この高々野球部の三年間というものは、非常に短い様に感じました。ついこの間入部した様な

自分は、中学の時に満足のいく成績が残せなかったのが悔しくて、今度は高校でその分頑張ろうと思いい野球を続ける事を決め、この高々野球部の門をたたきました。そして今日に至るまで、野球という言葉、野球というものの魅力にひかれて来ました。これからも、この言葉は、自分の心の何割かを占めるものと思えます。本当に小さい頃から好きで、毎朝、父と弟と三人でまだ自動車の通り始めない道でゴムボールの取りっこをしたものでした。それが今では、クラブをはめバットを握り、それも栄光ある高々のユニホームを着てプレー出来るまでに成長して、これもすべて諸先輩・諸先生の御指導のお陰だと感謝しております。自分一人の力ではどうにもならない時に知恵を貸して下さった先生も沢山おられ、本当に何度頭を下げてでも下げきれない程お世話になりました。

さて自分が主将の役を授かった時は、光栄などという良い気持ではなく、大変いやでどうしようもなかったという所が本音でした。でも受けた以上は、皆を一つにしようと努力をしました。しかし、中々うまくいきませんでした。そんな時は、何をやっても裏目に出るものでした。三年の時の公式戦は全部初戦で敗れるという結果でしたが、これはこれで自分達には自分達なりの輝かしい思い出なんだと胸を張っている事が出来ます。人生において、敗ける事も一つの勉強だと思えば決して損ではありません。本当に三年間には色々な事があり、勉強させて頂いただけでも自分は幸せです。

黄金時代の継承と発展を

バスケット部

神戸 敏之

前年度チームの関東大会Bブロック優勝・インターハイ出場という華々しい戦果を承けてスタートした我々は、前年度の活躍を継承し発展させる事を目標とした。しかし、初めは強化大会や新人大会で敗れてしまい、県高校総体とインターハイ県予選を残して、部員の間には焦りや動揺が生れて来た。だがそんな焦りや動揺も、川嶋尚武先生（四九回・保健体育科）やOBの皆さんの御指導の下、闘志として転化させる事に成功した。その結果、県総体では初優勝、インターハイ予選では二年連続優勝と、県内四タイトルの内二タイトルを得て、ほぼ我々のスタート時の目標を達成したのであった。

ところで、我々のチームの特徴を考えると、何といても第一に挙がるのがチームワークの良さであったと思う。三年一三名・二年一四名という大所帯でありながら、一つによくまとまっていたと思う。また、時には疎ましく感じられもしたが、伝統の力が我々の優勝に大きく影響していた事も否めないであろう。

悪い方の特徴として、部員の練習ざらにが挙げられよう。人間だれしも苦しい事はいやであり、私自身もそうであったから、まとめるのが大変であった。だが、県総体前は、部員一同意欲を持って充実して練習していたと思う。

既に昨年八月スタートした新チームは、現在県内公式戦無敗の快進撃を続けてお



全国高校総体（山形）（S53. 8. 1）

り、我々として頼もしい限りである。県外公式戦で一勝も出来なかつた我々の悔しさを晴らすべく、新チームには是非全国での活躍を期待したいし、またそれも可能であると思う。我々もOBとして微力ながら応援を続けて行こうと思う。

受身になるな

水泳部

須藤 聡

僕の水泳に対する考えが変わったのは、昭和五十二年、二年の時の青森国体である。この時のレースは、今思い出しても恥しくみつももないレースであった。四〇〇Mメドレーリレーは、前半ピッチが上がり過ぎてしまい、後半腕が回らなくなり、もう何をやっているのだからさっぱり分らない様な状態でゴール。次の一〇

〇M自由形では、前半セーブし過ぎてタイムが出なかった。この二本のレース内容が悔しくて自分自身に腹が立ち、「来年こそは自分に納得の行くレースをして見せる」と心に誓った。そこで、今までのレース展開を反省し、その欠点となる筋力の強化に秋・冬を費やした。

その結果は、二月の室内選手権県予選で表れた。短水路ではあるが、一〇〇M自由形で、念願の一分の壁を破る五九秒六を出した。このレース内容は、最高だったと言う事が出来ると思う。

しかし、その後腰を故障してしまい、六・七月の一番大事な時に練習出来ずに七月下旬から大会が始まり、北関東県予選・北関東大会、関東県予選・関東大会、すべて苦しい思いをした。こんな不調の時に立ち直りの切っ掛けをつかんだのが、八月の県高校総体四〇〇Mリレーであった。このレースは、第一第三泳者が頑張ってくれ、絶対に負けられないレースであった。無我夢中でゴール。逃げ切りは成功して第一位。この時のタイムが一分〇秒四。信じられなかったが、続く団体県予選は一分〇秒六、県民大会は五九秒九と調子を取りもどした。

思えば、一年前に誓った事が実行出来たレースは二月のレース一本だけで後は悔しい限りのレース内容であったが、例え一本だけでも出来たと言う事は素晴らしい事だと言う事は、僕の人生において大きな自信となるであろう。思うに、スポーツで大切な事は、「受身であるな。自分で考え、自分で作って行け！」と言

う事である。もちろん、そこには顧問の助言も必要である。部員が一塊になって考える事に、向上の基礎があるのでないだろうか。

最後になりましたが、三年間、丸山博先生（六八回・保健体育科）、水泳部の諸君、どうも有難うございました。

昭和五十三年度

高々運動部活動状況

剣道部

◇全国大会県予選

(五三・六)

団体

高々% — % 渋川西高 一回戦

高々% — % 榛名高 二回戦

高々% — % 前橋商 三回戦

個人

岡田秀昭(三年) 一回戦

井上隆(三年) 一回戦

◇学校対抗

(五三・九)

団体

高々% — % 利根商 一回戦

個人

新井 泰雄(一年) 三回戦

高橋 徹(二年) 二回戦

◇新人大会

(五三・九・一〇)

高々% — % 安中高 二回戦

高々% — % 利根商 三回戦

高々% — % 高崎商 四回戦

高々% — % 農大二高 準決勝 三位

踏 跡

今年の反省 その 2



この一年の成果

ラグビー部

高橋 博

八人制大会優勝、県高校総体準優勝、国体ブロック予選準優勝、秋季大会優勝、全国大会北関東予選準優勝。これがこの一年の戦績である。

昨年は、この誌上の抱負で全国大会・国体の壁を破る事を目標として挙げたが、果す事が出来ず残念に思っている。しかし、この一年間の努力は将来きつと役に立つだろうし、練習を共にして来たチームメイトや他校ラグビー部の仲間ともこれから一生親しい付き合いが続くだろうという事が何にも換え難いこの一年の成果であると思う。

最後に、チームの発展を祈り、お世話になった諸先生・OBの方々に感謝したいと思う。

飛 躍

サッカー部

山田 保

高々のサッカー部は、他の部とよく比較され、弱いといわれる。昨年一年間、部員達は、この定説を覆そうと懸命になって練習して来た。しかし、当初の目標より悪く、最高ベスト8が二回という残念な結果に終わった。今、負けた試合を振り返ってみても、悔しい気持が鮮明によみがえって来る。後輩達は、この悔しさを忘れないで、昨年より、一歩でもいいから先へ進んで欲しい。

それでも、悔しい事だけでなく、誇れる様な事もあった。最後に追い付かれたがよく走り抜いた前橋高校との定期戦。PK戦で敗れたが、終了寸前に同点とし意地を見せたインターハイ県予選での高崎工業高校戦など。サッカー部は辞めても、これらの試合はいつまでも忘れないだろう。部員達も、貴重な経験が出来、素晴らしい友にも出会い、満足していると思う。一応は、部活動の素晴らしさを味わった様だ。

これから後を継ぐ後輩達には、勝つ事に貪欲になって欲しいと思う。こういうチームなら、簡単に負ける事はない、どのプレーを見ても生き生きとしているだろう。そして、これだけやったんだと誇れる様な思い出を作って欲しい。そうしてこそ、サッカー部で過した時間が貴重なものになるだろう。

サッカー部は、五年前インターハイ県予選で優勝した事もある。そして、何よ

りも高々生である。いつか再び優勝する日が来ると信じる。

来 年 を 期 待 す る

剣 道 部

三木 克之

今、主将の任を解かれて振り返ってみると、部員の皆に何もしてやれなかったなあという後悔だけが残っている。

思えば、上級生が輝かしい伝統と実績を遺して引退し、僕が主将の大任を預かったのがつい昨年の事の様に思い出される。最初は、剣道部を今以上に立派な盛んな部にしなければならぬと意気込んだものだが、月日が流れるに従って、一向に上達せず試合に勝てない自分自身に腹が立ち何とも情ない気持になった事は数知れない。そんな時、自分の非力を忘れて、部員を引く張って行かねばならぬ立場に立っている自分が、部員の足を知らず知らずのうちに引く張ってしまった事が幾度もあった様な気がする。

しかし、剣道を三年間続けていて、時には苦しかった事もあったが、高々生活で何事にも換え難い素晴らしい充実した時を過ごす事が出来て、今かすかな満足感を覚えている。未熟ではあったが自分なりに一生懸命頑張ったし、剣道部も無事に後輩にバトンを渡す事が出来た。また部活動を通じて多くの先輩・友・後輩が出来て、心の糸に接する事が出来た事を心から感謝している。

最後に、お世話になった先生・諸先輩に心よりお礼を申し上げてペンを置く。

一 年 間 を 振 り 返 っ て

軟式庭球部

原田 佳幸

この一年間は色々な苦勞がありました。が、我々庭球部員を大きく成長させてくれた年でもあります。

まず第一に、試合に勝つことがすべてではなくて、飽くまで目標であり、それを達成するまでの過程が最も大事であるということが分ったこと。例えば、それはコート整備であり、あいさつ・集合・返事など一つ一つがしっかりとっていない選手ではいけないということです。

次に、勝つための条件には「天の時、地の利、人の和」というものがあります。特に「人の和」というものがこんなに大きな力を持ちこんなにも尊いものであることが分ったことです。

今、私が自慢出来ることは、県高校総体で優勝したことではなく、インターハイ予選の団体戦までレギュラーではなかった三年生が最後まで部活動に参加し大声で応援してくれたことであり、OBが一人もいたということです。

昨年、我々は、幸運にも県総体で優勝することが出来ました。これからも多くの後輩に、あの優勝の味を味わってほしいと思います。そして、長い伝統を持つ軟式庭球部が、現在の状態を維持するのではなく、関東・全国の壁を破り群馬の高々でなく全国の高々に成長することを願い、そのためには協力を惜しまないと思っています。

何事も徹底してやれ

陸 上 部

町田 勲

陸上競技部員として過したこの三年間を振り返ってみて、はっきり憶えているのは、苦しい練習やつらい練習のことが多い。溶鉱炉の様な暑さの中で倒れる寸前まで走った夏の合宿、冷たい赤城おろしの吹き付ける中で冬の基礎トレーニングなど、数え挙げると切りがない。胸が破れそうに苦しい時、それでも走りながら、「何で俺はこんなことをしているのだろう」とよく自問したものだ。なぜスポーツをやるのだろうか。僕は、次の様に考えている。

まず第一は、体力を付けるということだ。何をやるにしても体力は、重要な資質であり、必要不可欠な条件であると思ふ。

第二は、苦しい練習に耐えることで自信が生れるということだ。困難な壁に突き当たっても、「俺はあれだけ厳しい練習を克服したんだ」という自信が支えとなつて、その壁を乗り越える大きな力になる。

第三は、集中力が付くということだ。練習を消化するには、それに打ち込む精神力が必要になる。打算的な考えかも知れないが、集中力は、受験勉強にも直結した利点だろう。

そして最も大きな理由は、スポーツをやるのが楽しいということがある。苦しいつらい練習であっても、その後には一日の練習をやり終えたという満足感と

さわやかな充実感があるものだ。最後に、これからスポーツをやりたい、又は現にやっている後輩諸君に一言いっておきたいことがある。それは、やるかには徹底してやれということだ。苦しめても、全力でぶつからなければいけないということだ。どんなに時間を掛けても、気持の緩みがあったり手を抜いたりしたら、効果が無いばかりか、単なる時間とエネルギーの浪費になるだけだから。これからの活躍を期待している。

マンネリ化を打破しよう

山 岳 部

青木 幹昌

合宿の充実、個人山行の活性化などを目標に、「自分達の山岳部」を目指した一年間であった。

六月の歩荷訓練山行に始まり、夏の東北・飯豊連峰縦走、冬のスキー合宿、春の谷川連峰における雪上訓練、五月の県高校総体への参加、六月の歩荷、そして夏の北アルプスと続いた我々の一年間の活動とその内容を振り返ってみると、反省点が多数ある様に思われる。

まず第一に、不十分で練り切れていない山行計画が多かったことが挙げられる。幸い大きな事故にはならなかったが、谷川での歩荷、冬合宿など大いに反省すべき所があった。山行の対象となる山岳に對しての事前研究、従来よりも長期に渡る計画検討、そして各部員のもう少し前向きの姿勢が必要だった。

つたこと。夏は縦走、冬はスキー、春は雪上訓練と決ったパターンになってしまった。

そしてもう一つ、登山技術についてである。体力面はともかくとして、山に對する知識面においては、私の力量不足のためほとんど部としての向上が見られず、相変わらず個人任せになってしまった。しかしそんな中でも、個人山行については活発化の傾向が見れて来た。

最後に、後輩諸君には、我々の行動を反省材料とし、競技登山に走ることなくより一層意欲的な活動を期待したい。



写真植字・印刷一般

株式会社 新扇堂写植

代表取締役

丸 山 功 一 (六〇回)

高崎市浜尻町九九二一五
電話〇二七三(六二)七八七六

高崎市議会議員
株式会社友松喜平商店代表取締役

友 松 敬 三 (六一回)

高崎市相生町三〇
電話〇二七三(三二)二二六〇

昭和五十三年度

高々運動部活動状況

野 球 部

- ◇春季関東大会予選 (五三・四)
 - 高々16—0大間々高 一回戦
 - 高々4—5藤岡高 二回戦
- ◇全国選手権大会県予選(五三・七)
 - 高々5—6太田高 一回戦
- ◇秋季関東大会県予選(五三・一〇)
 - 高々15—0佐波農コールド二回戦
 - 高々3—1西邑楽高 三回戦
 - 高々3—0樹徳高 準々決勝
 - 高々0—7農大二高 準決勝

陸 上 部

- ◇学校対抗 (五三・九)
 - 得点2 (部二二位)
 - 一〇Mジュニアハードル
 - 町田 勲 (二年) 15秒9 五位
- ◇一・二年生大会 (五二・一〇)
 - 四〇〇M
 - 齊藤新吉 (二年) 52秒3 五位
 - 一〇Mジュニアハードル
 - 永井正樹 (二年) 15秒7 三位
 - 加藤隆志 (二年) 16秒7 六位
 - 走巾跳
 - 永井正樹 (一年) 6m44 五位
 - 円盤投
 - 神成政行 (二年) 31m10 六位



先輩、今年も頑張ります

現役の抱負 その1



今、若さあふれる時に

剣道部

三年 関 隆一



入学以来早二年を剣道の稽古に打ち込んで来ました。そして今、残り少ない現役選手としての日々を、精一杯前進すべく練習に励んでいます。

「光陰矢のごとし」といいますが、この二年間の部活動の中で培いはぐくんで来たものは多大であると思います。毎日平生の練習はもとより、春・夏の合宿において、同じ道場で汗を流し同じ釜の飯を食った者同志が苦しい練習に耐え、互いにここまで来たのだという感がつくづくするものです。これは今、若さあふれるこの時を、部活動に一生懸命励んだ者だけが感じ得る最高の特権であるでしょう。

う。

もちろん、私達のこういった活動の陰には、時折母校を訪れ後輩の私達を激励しあれこれと面倒を見てくれるOB方、またそれ以前の諸先輩の力も大きくある事と思います。それが故にも、高々運動部の一員である私達一人一人が、諸先輩の我々に対する期待や今日に続く昔からの努力にこたえるべく、高々スポーツマンを自覚し努力して行くべきでしょう。練習に疲れ挫折しそうな時、楽な道に誘われそうな時もあるでしょう、そんな道です。しかし、その行く末には、必ず素晴らしい思い出、満足感が待っています。高々剣道部、そして更には全運動部の諸君、皆で励まし助け合い、共に技を競いみがき合い、頑張って行くうではありませんか。

県総体優勝を目指して

水泳部

三年 石田 鉄光



我々は、シーズンオフの冬の間、夏に備え陸上トレーニングをして来ました。そして、シーズン開幕も間近に迫って来ています。

我々の第一目標は、七月末に行われる関東大会に多くの部員が出場すること。そして、その中から一人でも全国大会出場者を出すことです。

しかし、最大の目標は、やはり八月の県高校総体(学校対抗)です。この大会

では、五十年・五十一年と高々の二連覇の後、一昨年・昨年と利根商業高校に団体優勝を奪われ高々は二位となっていました。そこで、今年こそは、団体優勝を奪い返そうという訳です。

とにかく、今シーズンの大会がすべて終わった後で悔いが残らないようにベストを尽し、先輩の遺された数々の栄光と水泳部の伝統に恥じないように頑張ってくださいと思っています。

野球部

三年 横山 瑞史



昨夏、新チームを結成して既に半年が過ぎてしまった。主将としてこの半年を振り返ってみると、全く悔いる事はばかりだった。

主将としてばかりになり切る心算だったのが、中途半端のままここまで来てしまった様だ。それでも去年の秋は、投手の大野和弘(三年)が踏ん張り、それにつられたかの様に皆が張り詰めた気持ちになった。それでベスト4までは残ったものの、実力差はあったにせよ結局エラーに始まって東京農業大学第二高校に大敗した。敗けた後の練習の時こそ主将の立場が重要になって来るのに、僕はろくな事も出来なかった。

さて春となりふたを開けてみると、肩・ひじの痛み、けがなどで、秋のレギュラーが四人試合に出られなくなった。こ

の中の一人が僕で、全く情なくなっている。やむを得ず、主将の代行を三塁手の小須田和彦(三年)に頼んだが、レギュラーを欠いたナインなので余計彼にすまなく思う。

なってしまった事をとやかくいう事もないが、大会中いつこうなるかもしれないのだ。そのためにも一・二年生を試合で使える様にし、またそれよりけのない練習を心掛けなければいけないと思う。そして、三年生のだれもが「俺がしないだけでがする」といった自覚を持って練習に試合に取り組んで、全員でする野球を目指したい。

こんな事は、諸先輩から何度も聞かされた様な事ばかりだ。後は、僕達がどうこれを実行するかという事だけだ。

高々運動部活動状況

昭和五十三年度

ラグビー部

◇関東大会 前橋市(五三・六)

高々15 (9-8) 17 神奈川
6-9 茅ヶ崎高

◇全国大会県予選 (五二・九一・一)
予選リーグ 四勝(Dブロック一位)

決勝トーナメント

高々52-3 桐生高 一回戦

高々14-0 伊勢崎東高 準決勝

高々15-0 中央高 決勝

◇全国大会北関東予選

「相撲部」と言われ続けて 柔道部



三年 深沢 功

柔道の大会において中々勝機を見出せない我々は、よく校内の者に「相撲部に名前を変えた方がいいのでは……」などと言われる。なるほど、柔道部は、県内の相撲大会で数々の栄光を得てはいる。だが、果してこれでいいのだろうか。

ここで問題になるのが、「柔道と相撲の両立、そのための柔道の強化」と言う事であろう。柔道の強化において、「練習時間の延長」は、遠距離通学者の足の問題などもあって大幅に行える可能性が少ない。その様な訳で、「練習内容の充実」が適当であろう。

現在の柔道部の練習を振り返ってみると、時間をむだに費やしている事が分る。例えば……

一、開始時刻 きちんと練習の開始時刻が定まっているにもかかわらず、定刻に全員集まって練習が始まったためしがない。

二、準備運動 部員の動きが緩慢で、次の動作へと移るのに時間が掛る。

三、休憩時間 やたらと長く取り過ぎて返って逆効果となる。

以上の事を踏まえて考えるに、柔道の面の強化には柔道に対して本気になって取り組み自分の肉体を極限までにいじめ抜き貴重な時間を有効に使い、先輩方が残して下さった伝統・気風を大切にしながら、高々柔道部の名に恥じない様な部にして行きたいと思う。

3S精神の下に

バレー部



三年 桜井 隆

バレーボールに限らず、あらゆるスポーツにおいて、「スポーツをする」と言う事はどう言う事でしょうか。ただ単にプレーをすると言う事ではなく、精神も共に向上しなければスポーツをしたとは言えないのではないのでしょうか。

我々バレー部は、高々の3F精神ならぬ3S精神を掲げて、バレーボールを通じて精神の向上を図っています。ところで3S精神と言うのは、真剣・集中力・主体性と言う三点です。これは、あらゆるスポーツにおいても重要なものです。我々は、この精神の下、常日ごろ練習に取り組んでいます。そして、我々がこうして毎日自由にバレーボールに臨めるのも、顧問を始めとする数多くの先輩達の援助・励ましがあればこそだと、部員一同感謝しております。

北関東大会においては、その先輩達の声援も大きかったのですが、二年連続全国大会出場と言う期待にこたえる事が出来ずとも残念です。しかし、いつまでも敗れた事にこだわっていたら、プレーはもとより、精神の向上などあり得ません。我々は、この苦敗を胸に刻み、そして一つのステップとして、これからの練

習に励んで行こうと思っています。

〈新チームの戦績〉

- 国体県予選 準優勝
- 秋季大会 優勝
- 新人大会 優勝
- 全国選抜大会北関東予選 準優勝

ラグビーの勝利 ラグビー部



三年 富田 貴裕

勝利、これからの一年間の目標とした。ここ二年間、我がラグビー部は、県代表として埼玉・山梨の代表とそれぞれ国体・全国大会を懸けて争うが敗けている。しかし、埼玉代表の熊谷工業高校とは、一昨年9-52、昨年0-35と差は縮まって来ているのである。そこで、今年は、勝利の中でも全国大会へ出場出来る勝利。埼玉・山梨の代表に、何としても勝ちたいのである。県内で優勝する事は言うまでもない事である。

そこで、ラグビーに就いて少し書いておきたい。ラグビーには、前進・サポート・継続・圧力と言う四つの基本理念がある。

まず第一に、「前進」。前方とは、未来及び可能性を秘めていると思う。これこそ男のロマンである。ラグビーでも、勝つためには、相手より一歩でも前プレーをしなければならぬのである。第二に、「サポート」。支援とは協力

熊谷市(五三・一一)
高々0 (0-14) 25 埼玉
0-21 熊谷工

◇八人制大会 (五四・一一)
西部地区予選

高々B6 — 22 農大二高A 一回戦
 高々A22 — 0 富岡高B 二回戦
 高々A18 — 0 藤岡工 準決勝
 高々A0 — 18 農大二高A 決勝
 決勝トーナメント
 高々A0 — 22 桐生高A 一回戦

◇新人大会 (五四・一一)

高々57 — 0 高崎商 一回戦
 高々18 — 4 太田高 二回戦
 高々14 — 14 中央高 抽選 準決勝
 高々一不戦勝 — 前橋高 決勝

の事である。世の中は、自分一人では生きて行けない。それは、ラグビーでも同じ事なのである。すなわち、プレーヤーを孤立させてしまうと、必ず敵にボールを取られてしまうのである。

第三に、「継続」。ラグビーでは、相手の陣型を崩す事が即トライに結び付くのである。そのためには、プレーを有利に続けていけばよい。すなわち、継続は力なのである。

そして最後に、「圧力」。巨人軍の王選手が、打席に立ち相手投手をにらむと投手はつい好球を投げてしまいホームランされると言う。ラグビーでも、相手のミスはトライしやすいのである。ラグビーボールは人生である。そして我々は、人生の勝利者でいたい。

先輩、今年も頑張ります

現役の抱負 その2



県総体にすべてを懸けて

体操部

三年 儘田 誠二



体操部は、現在四人です。大会におけるチームの定員も四名ですから、ぎりぎりの出場資格を持っているという状態です。この様な極度に苦しい状況に置かれている我々ですが、県高校総体六位を目標に日々の練習に励んでいます。

全国大会出場、県内無敵などという部に比較されると、六位とは余りにも小さな目標と感じられるかも知れません。しかし我々にとっては大きく、また達成されれば十分な満足感を得られる事でしょう。県内での体操競技は、日に日にレベルアップしています。全国優勝も果たした高崎工業高校を始めとし、強豪が美技を

競い合いひしめき合っています。そんな中に、我々が六位に食い込んで行く事は至難ともいえる程なのです。しかし我々は、この目標を必ず達成する決意でいます。一昨年・昨年と七位という結果に終り涙を飲んだ先輩のためにも、我々は絶対に果さなければなりません。そしてそれは、体操部の将来への飛躍の発展につながるための布石を築くためにもです。

今の段階では優勝などとても無理ですが、将来には是非高々体操部の黄金時代を迎えて欲しいものです。幸い今年は、山口富士生先生(保健体育科)というエキスパートを迎える事が出来ましたので徐々に向上して行く事は確かです。しかし心配なのは、部員数の減少です。幾ら指導が良くても、人材が集まらなければ何にもなりません。我々としては、校内における体操競技の普及に努め、部員増加に励んで行きます。

さて、我々自身の事にもどりますが、とにかく我々の数少ない発表の場である、県総体には全力を尽し悔いのない演技を行える様頑張ります。

二部優勝を目指して

陸上部

三年 齊藤 新吉



重ね、二部優勝、そして一部へ昇格する事を誓います。

一つ、県高校総体で一人でも多く入賞し、関東大会、更にはインターハイで活躍する事を誓います。

まず、二部優勝。これは決して高嶺の花ではありません。現に高々は、過去二部優勝四回の実績を持っておりまして、ここ一番の勝負に力を発揮するという伝統もあります。それに今年も部員も例年になく多く、またあの空っ風の中で続けた冬練習も順調にこなしその成果も春の陽が暖かさを増すにつれて表われて来ている。このまま順調に進めば、各大会でも良い成績が出て、九月には一部昇格という朗報もお知らせする事が出来ると思います。

次に高校総体・県大会は、五月中旬に伊勢崎で行われます。けががなければ、最低五人は関東大会へ駒を進める予定ですし、絶対一人はインターハイへ行つて暴れて来ます。またその他の者も、自己記録をコンマ一秒でも更新しようと燃えています。

僕達は今、高々の四〇〇Mトラックで練習に汗を流しています。県内でも有数の設備の中で走れる事に誇りを持ち、先輩に感謝すると共に、成績も県下にとどろかせそれに報いたいと思っています。どんな運動でもそうですが、練習は、その選手自身がある目標に向かって自主的に行わなければ成果は上がらないといわれています。今、僕達にはその大きな目標がはっきり見えます。そして目標達成、すなわち二部優勝・インターハイ出場を陸上部一丸となつてなす遂げてみせます。応援して下さい。

昭和五十三年度 高々運動部活動状況



水泳部

その一

◇関東大会県予選 (五三・七)

一〇〇M自由形 須藤 聡(三年) 1分02秒0 二位

二〇〇M自由形 須藤 聡(三年) 2分20秒9 三位

一〇〇M平泳 小川 淳(三年) 1分21秒9 三位

一〇〇Mバタフライ 糸井良弘(二年) 1分11秒7 三位

二〇〇Mバタフライ 美細津正(三年) 3分17秒0 三位

一〇〇M背泳 石田鉄光(二年) 1分21秒1 二位

二〇〇M背泳 倉林武美(三年) 2分57秒0 二位

四〇〇Mリレー 高々(須藤・小川・倉林・齊藤) 4分16秒0 一位

八〇〇Mリレー 高々(石田・齊藤・小川・須藤) 9分54秒2 四位

四〇〇Mメドレーリレー 高々(須藤・小川・倉林・齊藤) 4分58秒8 三位

◇関東大会・全国総体関東予選

甲府市(五三・七)

一〇〇M自由形 須藤 聡(三年) 1分01秒4 (落)

V3目指して

バスケット部

三年 上原 政昭



県新人大会準優勝・
県高校総体優勝・イ
ンターハイ県予選優
勝という様に、素晴らしい戦績でした。

小粒ながら各人が特徴ある技を持ち、よくまとまっていたと思います。

新チームになって、すぐ県強化大会で優勝し、次の目標として過去一度も群馬のチームの出ていない選抜大会出場を目指しました。県新人大会で全勝優勝し今年こそはと周囲から期待されましたが、続く関東大会Aブロックで不運にも最初からこの大会優勝校と当ってしまいました。超高校級といわれる東京・中央大学付属高校に前半互角に戦いましたが、結局我々の夢は消え去りました。

さて新年度を迎える現在、我々は、まだ県外公式戦に勝っていませんし、県内でも追われる立場にあります。ですから低身長を補うために、スピード・スタミナを付け、シュート力・ディフェンス力を強化し、常に技術面の向上を計らねばなりません。

我々には、県総体二連勝・インターハイ県予選三連勝という大きな目標があります。一つのタイトルを連続して得るのは困難かも知れません。まして、全国で勝ち進むのはもっと大変でしょうが、可能性は十分あると確信しています。これから新入部員も加わりますのでよ

り一層盛り上げ、半世紀を越える永い伝統やOBの方々の陰ながらの援助を支えに、部員一同一丸となって頑張ってください。

着実に基礎をすえ勝利に

硬式テニス同好会

三年 浜辺 啓明



今年、硬式テニス同好会にとって、本格的な活動を始める言わば出発の年です。

今年の目標としては、まず県高校総体やその他の試合に出来るだけ出場し、他の部に負けない程の成績を挙げ、これからの新しい部活動への基を作り上げたいと思います。昨年は、団体戦ではベスト8に初出場ながら駒を進めました。今年、昨年以上の成績を取め様と毎日練習に励んでいます。

次に、硬式テニス同好会は、昨年の秋に結成されたばかりでまだ一年余りしか経っていません。だから僕達は、硬式テニス同好会にとっては初のOBと云う事になります。そこで、高々の伝統に恥じない活動と、これから硬式テニス同好会が長く続く様に後輩の指導と同好会として行っていけるだけの基を築きたいと思えます。

最後に、試合に勝つ事だけを考えるのではなく、精神の強化を硬式テニスを道具として行いたいと思えます。先程僕ら

住友海上火災保険株式会社代理店

広田住宅センター

代表

広田 誠四郎 (六四回)

高崎市田町 九二

電話(〇七二)五〇〇五五

ダスキングメザワ

常務取締役

梅沢 徹 (六五回)

藤岡市小林四五一

電話(〇七四)二四四四一

が硬式テニスの最初のOBになると言いましたが、実は僕らの大先輩に故清水善造氏(七回)がいらっしゃいます。清水氏は、高崎中学校で勉学に励み、デビス杯や全英オープン準優勝と言う成績を挙げました。彼も日ごろの厳しい練習を通して、この様な偉大な成績を挙げました。僕達も、毎日の練習から「勇氣」を養いたいと思えます。この勇氣とは、忍耐とか、沈着とか、そしてはるか先の目的を目指す洞察力を含みます。また、失敗とばかり分かっていても、落胆せず、失望せず、目的を見失わないで最後には勝つと言う信念を持たせる力です。この勇氣をもって、どんな困難にも立ち向かう強い精神力を養い、第二、第三の清水善造となりたいと思えます。

〇〇M自由形

須藤 聡 (二年) 2分20秒0 (落)

〇〇M平泳

小川 淳 (二年) 1分21秒2 (落)

〇〇Mバタフライ

糸井良弘 (二年) 1分13秒6 (落)

〇〇Mバタフライ

美細津正 (三年) 3分12秒9 (落)

〇〇M背泳

石田鉄光 (二年) 1分19秒3 (落)

〇〇M背泳

倉林武美 (二年) 2分54秒6 (落)

四〇〇Mリレー

高々(須藤・斉藤・倉林・小川) 4分15秒2 (落)

八〇〇Mリレー

高々(石田・須藤・倉林・斉藤) 9分51秒6 (落)

四〇〇Mメドレーリレー

高々(須藤・小川・糸井・斉藤) 4分55秒7 (落)

◆新入大会

〇〇M自由形

斉藤政宏 (一年) 1分03秒1 一位

〇〇M自由形

石田鉄光 (二年) 2分32秒3 二位

〇〇M平泳

原田文明 (一年) 1分29秒8 二位

二〇〇M平泳

原田文明 (一年) 3分18秒9 三位

一〇〇M背泳

石田鉄光 (二年) 1分20秒0 二位

二〇〇M背泳

都筑秀明 (一年) 4分10秒4 三位

先輩、今年も頑張ります

現役の抱負 その3



の練習ではない様なプレー・作戦にしばしば遭遇します。その度にろうばいし、苦い涙を飲んで来ました。やはり実力が無かったのです。

証を求めて

サッカー部

三年 中町 文彦



六月の新チーム結成以来今日まで全国大会県予選・高崎市民大会・新人大会と三つの大会に参加し、チーム一同力の限り戦って来ました。しかし結果は、この誌上に載せられる様なものではありません。

今のチームに対する感想は、「大会に弱い」と言う事です。練習試合では目を見張る様なプレーを見出す事が出来ますが、どうも大会になると緊張からか普段のプレーが出せませんでした。「大会に弱い」と言う事は、「実力が無い」と言う事です。しかし、経験した方ならお分りの事と思いますが、大会になると普段

さて、言訳めいた事ばかり言っていても始まりません。これからの残された少ない日々で、いかにしてチャンスを物にするかですが。我々も、高々サッカー部で汗や涙を流して、もう二年が過ぎました。僕は、高々サッカー部でプレーをしたんだと言う証が、大会優勝だと思っています。後二カ月足らずで県高校総体、そしてインターハイ県予選とあります。絶対に勝とうと意気燃える幾多のチームの中で優勝すると言う事は、容易ではありません。しかし、「やらなくては！」部員一同、心に秘めていると思います。我々は、証を得るために残り少ない日々に懸けてみます。そして必ず……。

インターハイを目指して

軟式庭球部

三年 原 敬



僕がキャプテンを務める様になって九カ月経ちました。現在、部員は二四名です。

我々は、新チーム結成の時、大きな目標を立てました。それは、「インターハイ出場」です。というのは、一期上の先輩達が、県高校総体では見事優勝したのですが、一カ月後のインターハイ県予選では惜しくも三位となり出場はなりません。

株式会社 平野屋

専務取締役

須田修巨 (六六回)

高崎市問屋町二一〇一〇
電話〇二七三(六二)四〇四八

閉会式後、雨の降る中、円陣を組み声を詰らせながら三年間の思い出を語ったあの先輩達の悔しさが、我々の心にジーンと伝わって来たからでした。そして、「来年こそ俺達の手でインターハイに出場してやるぞ」という気持で一杯になりました。

現在、林敏夫先生(社会科倫社)・丸山博先生(六八回・保健体育科)の指導の下で練習に励んでいます。その成果あつてか、秋季新人戦では二位、続く全国インドア県予選では優勝を果し一月の関東ブロックに出場する事が出来ました。これも、諸先輩の援助によるテニスコースト四面の完成、勝俣真先輩(五二回)・塚越章司先輩(五八回)を始めとする先輩方の熱心な応援によるものと大変感謝しております。しかし、我々は、まだ若く人間としても未熟です。色々な悩み・迷いが心を冒し、時にはテニスに懸ける情熱も冷めかけてしまう事もあります。そんな時は、チームワークでお互いを励まし合い頑張っています。是非、未熟な我々に指導を就けて下さい。いよいよ本番が近づいて来ました。インターハイ目指してダッシュ!

昭和五十三年 高々運動部活動状況

水泳部

その二

二〇〇M個人メドレー

小幡一夫(二年) 3時21秒4 三位

四〇〇Mリレー

高々(原田・小幡・石田・斉藤) 4分41秒5 二位

八〇〇Mリレー

高々(原田・小幡・斉藤・石田) 11分12秒0 二位

〇国体 少年A

長野市(五三・九) 1分01秒69 (落)

四〇〇Mメドレーリレー

群馬(清水・鈴木・平田・須藤) 4分32秒23 (落)



卓球部

◇全国総体県予選 団体 (五三・六)

高々3—1 藤岡高 一回戦

高々3—0 渋川工 二回戦

高々1—3 藤岡工 三回戦

◇新人大会 団体 (五三・九)

高々3—0 西邑楽高 二回戦

高々0—3 中之条高 三回戦

卓球部

三年 瀬間 律夫



卓球部の県高校総
体に向けての抱負は
次の通りである。

が、昨秋の新人大会のベスト8決定戦で伏兵中之条高校に惜敗をしたために、今大会はノースードである。しかし、今年のチームは、ここ数年にない戦力の充実振りである。従って、昨年のベスト8より一步上昇して、ベスト4入りを何とかして果したい。

次に個人戦であるが、これは一発勝負故に運というものの作用がかなり大きいので、難しい所だが、波に乗れば上位に進出出来る力を皆持っている。一応の目安として、ベスト16以内に三、四名、その中から一、二名が関東大会出場権の得られるベスト8に入ればと思っている。最後にダブルスであるが、これは我々の得意競技である。出場出来るのは二組だけだが、その二組共ベスト8に入る事を目標とし、あわよくばこれも関東大会出場権の得られるベスト4、あるいはそれ以上をねらいたい。

さてば色々書き並べたが、県総体は三年生にとって今までの練習の総決算である。部員の力を結集し、部のムードを最大限に盛り上げて行きたい。特に、精神面の充実、それからベストのコンディション作りを配りたい。そして、振り返って悔いる事のない様に思い切っ

プレーし、高々の総合優勝のために少しでも貢献したい。

高校山岳部というもの

山岳部

三年 須永 勉



我々が山岳部活動の中心になって、早一年経とうとしてい
る。その中で、県教

育委員会から圧力を受けて大幅に縮小さざるを得なかった春合宿は、私達に大きな問題を投げ掛けたと思う。

県教委・県高校体育連盟によると、岩登り・雪山登山禁止。雪山においては、極簡単な尾根の下部に取り付く事すら許されない有様なのである。こんな考え方は、登山そのものに、あるわくを作ってしまう事になるのではないだろうか。いや、現実にはそうなっている。その上、何か事が起ることに登山の範囲を縮小させてしまうやり方は前向きとは思えないし、その中、個人山行禁止という事にもなり兼ねない。お偉方は、そうやって、山岳部をハイキング部化し一つのわくの中に閉じ込めて置けば気も楽であろう。しかし、そんな県教委や県高体連の方針により、山岳部活動に希望を失い落胆させられてしまった高々生が多数いる事も付け加えておきたい。

これから、もう何カ月も我々の活動する時間はないが、自分達の山岳部”を
目指して頑張っ

事 業 報 告

昭和五十三年五月

- 五・三〇 軟式庭球部
- ラグビー部
- バレー部
- 柔道部相撲班
- バスケット部に餞別
- ― 関東大会 ―
- 六・一 高々八〇周年記念式典
- に会員多数列席
- 七・四 「翠巒体育」五号発行
- 七・二一 水泳部に餞別
- ― 関東大会 ―
- 七・二八 バスケット部に餞別
- ― 全国総体 ―
- 九・六 水泳部・須藤聡に餞別
- ― 国体 ―
- 九・一〇 第一回編集会議
- 一・一五 ラグビー部に餞別
- ― 全国大会 ―
- 二・二二 軟式庭球部に餞別
- ― 全国選抜団体大会 ―
- ― 関東予選 ―
- 二・二九 役員会：淌漁荘
- 二・二九 第二回編集会議
- ― 全国新人大会 ―



給排水衛生・空調設備工事
水道施設工事・管工事・電気工事
土木一式工事・建築一式工事

藤田工事株式会社

代表取締役社長

藤 田 登 (四九回)

取締役総務部長

池 田 章 (五二回)

取締役技術部長

秋 池 一 博 (五二回)

環境施設部長

南 雲 讓 治 (五四回)

本 社

高崎市飯塚町一、七四―五
電話 〇二七三(六一)八二―

栃木営業所

栃木市旭町一五―一
電話 〇二八二(二四)八四―

東京営業所

東京都中央区八重州一六―七
大久保ビル
電話 〇三二(二七八)八〇三〇

青森営業所

三沢市大町三一―一二三
電話 〇一七六五(七)四四四―

昭和54年度 高 々 運 動 部 活 動 状 況

(S 54・5)

第14回県高校総体入賞校(男子)

Table with 7 columns (種目, 成績, 1位, 2位, 3位, 4位, 5位, 6位) listing sports and winning schools.

第14回県高校総体総合入賞校(男子)

Table with 4 columns (1位, 2位, 3位, 4位) listing sports and winning schools.

※水泳(54.8)・駅伝(54.11)・スキー(55.1)・スケート(55.2)を除く

野 球 部

○春季関東大会県予選(54.4~5)

- 高々4-2前橋商 2回戦
高々8-2吉井高 3回戦
高々3-4前橋南高 準々決勝(延長13回)



翠巒エトセトラ 直木賞・井上賞

の創設

高々八〇周年記念式典において、永年にわたり同窓会長の重責を果された真木武次氏(一五回)と母校環境整備・教育振興に貢献された井上房一郎氏(一五回)に功労賞が贈呈された。その際に贈られた記念杯は高々に寄贈され、今年から真木賞・井上賞として在校生に与えられ、永く両氏を顕彰する事になった。

真木賞は校内活動で顕著な功績を遺した個人または団体、井上賞は活動の分野で関東大会・全国大会出場の個人または団体に与えられる。井上賞の第一回受賞者は次の通り。
バスケット部
関東大会Bブロック優勝 (昭五二)

- 二年連続全国総体出場 (昭五二)
バレー部
全国選抜大会出場 (昭五二)
水泳部・須藤聡(三年)
二年連続国体出場

翠巒体育 第六号
昭和五十四年十月十日発行
翠巒体育会事務局
〒三七〇 高崎市八千代町二一四一
群馬県立高崎高等学校内
電話 ○二七三(二四)〇七四
印刷 荒瀬印刷株式会社